ことば論

橋本主税（はしもとちから）

はじめに

「かたち論」では、科学研究の方法論として「かたち」・「はたらき」・「時間」・「意味」などについての考察を重ねてきた。その必然として言語体系についても議論をした。しかし、かたちの議論以上に言語体系は思考の大元になっている重要性から、独立して議論する必要性を感じ始めた。そこで、言語に関して「かたち論」の枠組みで思索したものをまとめておく。構成としては、言語＝論理体系であることを前段で簡単に触れており、それを具体的に検証する意味で後段では英語の感覚について議論している。なお、ここでは鍵となる言葉（「かたち」「関係性」「意味」など）を説明なしに使っているが、あまり神経を使わず読み進めてもらって構わない。「かたち論」を理解してからお読み頂く方が理解は深いだろうが、これはこれで単独の読み物になっていると思うので、まあ問題はないだろう。言語という「かたち」の意味を考える試みとしてご一読頂きたい。

第一部・言語とは

言葉というのは風俗・習慣・生活などと密接に絡み合っている。なぜなら言語は私たちの行動規範としての理論体系そのものであり、それが成立する土壌として生活習慣が存在するのだからである。

さて、「なぜ人を殺したらいけないのか？」と聞かれ「自分がされてイヤなことは・・・」と答えるのは愚の骨頂である。「俺は殺されても構わない」といわれた瞬間に人を殺す根拠を与えなくてはならない議論に意味があるわけがない。私たち人類は、生物の一員としてこの自然の中で長年暮らしてきた。その時には自然との関係を保たなければならないし、他の動物や植物との関係も上手に保っていかなければならない（これを最近では「エコ」と言って賞賛している）。それはとりもなおさず、私たちの子孫が永遠にこの世に存在し続けるための方法論である。もちろん、同じ人間同士の間でも人類が存続する方法論が採られてきたはずである。でなければ、いま私たちは存在しない。生物種によって、あるいは同じ種でも個体群によって自分たちが生き残っていく方法を模索してきた。その環境で最もよい道を選択し続けてきただろう。その中で、私たち日本人は「個」よりも「集団」を尊ぶ方法論を選択した。どちらが先なのかわからないが、日本語の論理体系も個から全体へと向かうのではなく、全体の中に個が存在するという論理を採択している。どうしても自分が存在する「よりどころ」を集団に求める傾向が日本人には強いと感じる。なんにしても、このような生活の中で日本語は成立してきたのは紛れもない事実である。その中には、「それをやったら集団が壊滅する」から理屈抜きに禁忌とされるも

のも当然できてくる。「なぜ人を殺したらいけないのか？」これは、日本人という範疇を超えて人類、あるいはいかなる生物種においても理屈が存在するものではない。理屈も糞もない。「人を殺してはいけないから、人を殺してはいけない」ただそれだけのことである。そうでなければ、そんな生物種は既に淘汰され絶滅しているはずである。そして、ここまで極端ではないにせよ、世の中にこの類の似非論理でなんでも説明しようとする風潮が蔓延っている。屁理屈でも無理に通せばそれが正しいという日常になっている。だから今、人の心がすさんでいるのだろうと感じる。

食べる行為を「頂く」という美徳は、日本人が誇るべきことであろう。言語で「頂く」と表現するだけで、その行為が尊いものになる。頂くとは、まさに頭の上に頂くのである。山の頂の様に、頭よりも高いところに奉るのである。日本では「言霊」と呼んで言葉を尊重する信仰があるが、これは迷信でもなんでもない。言語こそが私たちが持つ唯一絶対の論理体系だからである。だから、「いただきます」と言わなくなれば食べることを尊ぶ気持ちはなくなる。これは間違いない。ただの習慣でも構わないから、食事の前で合掌し頂こう。この行為が続く限り、日本人の思考体系には食事が尊いものであると刻み込まれ続ける。敬語も同じである。敬語を使っても使わなくても、敬う気持ちがあればそれでよいと考えるだろうが、気持ちというものがア・プリオリ※1に存在できるはずはない。気持ちや感情はすべて言語の論理体系に依存する。だから、「敬う」という「かたち」が言語に存在しなければ、尊敬の念など生じるはずがない。言葉遣いが躾の最も根本にあるのは当然なのである。子どもと同じ目線に立つということと、子どもに対等な話し方をさせるのとは本質的に異なる議論なのである。

※1：ア・プリオリ【(ラテン) a priori】
［名・形動］《より先なるものから、の意》中世スコラ哲学では、因果系列の原因あるいは原理から始める認識方法をいい、カント以後の近代認識論では、経験に依存せず、それに先立っていることをさす。『大辞泉』より

さまざまな思想信条があり、さまざまな宗教観がある。したがって道徳観や倫理観も多種多様である。それらは全て認められるべきだし、たとえ自分の信じる道徳観や宗教観とは異なったとしても全ての価値観は互いに尊重されるべきである。しかし、それらを全て認めたら、価値観の違いによるさまざまな問題が生じてくる。どちらかの価値観を優先したら別の価値観が否定されることは起こりうる。その上でもなお、「誰もがこれだけは最低限守る様に約束しよう」というのが法律である。だから「法律は最低限の道徳」と言われるのである。だから「法律に違反していない」というのは当たり前であって、法律に触れなければ何をしてもよいわけではない。それぞれの道徳観によって行動は支配されているはずである。そしてその道徳観を規定するのが言語体系であることは疑いようがない。「1980年代末のバブル経済期、日本人の多くが、努力・勤勉・誠実・真面目などといった、古来、日本人が崇めてきた徳目を、突如、卑下する様になった。以来、倫理的空白期が始まり、政治家・官僚・経営者、そして一般市民も、無宗教国日本に古来あった徳目を見くだし、不正や怠惰を恥じなくなった」と佐和隆光氏が嘆く様に、IT長者の人たちを含めて、「法律に触れていない」事を錦の御旗を掲げているかの様に言う人が表舞台に出てきた。いや、出てきただけではない。その人たちが社会的に認められる様になってきた。「金が全て」と言い切ってはばからない人間の論理が市民権を得た様に思う。自分が生きるために他の生きものの命を奪わなければならないのは、人間（生きもの）の「業」であるが、私たち日本人はそれを理解して生きてきたはずである。同様に、自分が儲けるには他人が損をするのである。他人が自分にお金を支払ってくれるから、自分の元にお金が集まるのである。だからこそ、相手にも払っていただくその金額に見合うサービスを提供するよう努力をするし、周囲の全てに感謝もするのである。道徳に照らして恥ずかしいことは、いかに法律には触れないとしてもしないのが日本人の美徳であったろう。それを、「バカなやつからは金をむしり取ればいい」、「自分だけが儲かればいい」と言う価値観、「法律にはぎりぎり触れなければいい」、「法律に多少触れても口八丁で屁理屈をこねて逃げおおせれば

OSが違います

いい」という価値観はきわめて危ういと思う。

「かたち論」で考察した様に、脳がコンピュータのハードであり、言語はソフトである。厳密に言えば、脳というハードに対する日本語・英語はシステムソフトウエア（OS）である。あるいはコンピュータ言語のシステムである。その上にワープロや計算などのソフトが動く。したがってある OS ではこのワープロソフトは動くが、別の OS 上では動かないと言うことは普通に起こる。PC にとっての OS が脳にとっての言語であり、その上で働くワープロや計算などのソフトは、宗教観や道徳観あるいは常識という類のものと考えてもよいかもしれない。システムソフトウエアが同じであれば日本語を話す人は皆同じ思考を持たないか？との疑問が生じるかもしれないが、現実問題としてもそれが違うことは皆が知っている。まずは、システムソフトウエアもバージョンが違う様に、おそらく全ての人が微妙に異なるシステムをインストールされている。どのような人たちからどの様に言語を教えられるのかによってインストールされる言語体系は絶対的に異なる。ハードの違いもある。コンピュータもディスクの容量や処理速度などさまざまある様に、脳だって生物学的にその能力に個人差はある。同等のシステムがインストールされても、その処理に違いが生じてもおかしくない。さらにはシステム上に書き込まれる道徳観や宗教観などのソフトは生育の過程によってさまざまであるし、それ以外の経験によってもさまざまな価値観が後成的に植え込まれるのだから、同じ思考体系が存在することの方が確率的に考えてもありえない。サピアは、「脳の中に生じた衝動は非論理であり、脳の中に体系づけられた言語こそが論理であり認識である」と考えた。だからこそ、「言語はア・プリオリに存在する現実や思考を反映するのではなく、言語によって現実や思考の分節化・カテゴリー化が異なる」と論じたわけである。この考え方を認めれば、「日本語がインストールされた脳」と「英語がインストールされた脳」では、思考方法が完全に違っていても不思議ではない。日本人でなければ考えが及ばない科学的発見だって存在するに違いない。

私たちは、西洋科学の洗礼を受けすぎている。下手をすれば日本的なものの考え方を「非論理的」だと思う傾向にある。確かに、似非（えせ）東洋思想は存在する。先日もある鍼灸専門学校から連絡をもらい、私の描いた図版の使用許可を請われた。図版の使用など何も問題はない。利用価値があるなら利用して頂ければよい。しかし、問題はその中身である。あらかじめ断わっておくが、私は西洋科学信仰者ではない。むしろそのまったく逆の考えを持っている。しかし、だからといって西洋科学の解析で真実だと信じられている現象は認めている。己の感情で「信じない」と言い始めた瞬間に科学は崩壊する。で、その鍼灸専門学校の内容であるが、なんというか似非仏教的であり、似非科学的であって、結局はなにも勉強などしたこともない人が、科学的に検証することもなく勝手な思いこみを見当はずれの図版を用いることで説明している。そして、東洋科学はある意味で不可思議さを醸し出す、神秘的であり、ともすれば仏教の臭いすらすることから、なぜだかこういう論理（論理としては完全に破綻しているのだが）にだまされる人たちがいるのは事実であろう。だから、東洋科学は「非論理的」であるという人たちも現われるのだろう。しかし、同様のうさんくさい科学は西洋にだって存在することは忘れてはならない。東洋科学の方法論がうさんくさいのではなく、東洋・西洋のどちらに限ったことではなく、どちらにしても正しい方法論を踏まなければ「怪しい」のである。私が言いたいことは、東洋科学を西洋科学の物差しで測って「非科学的である」と称することの愚である。これは、近年の「グローバル化」と同じ仕組みで、「グローバル化」と呼ばれることの多

くは「アメリカ化」だと感じる。アメリカの仕組みはアメリカ国内においては機能しているのだろう。しかし、それを日本にそのまま移植することには無理がある。これに関しては、最近の科学社会を例にいくつか議論したい問題が身近にあるが、本題とは合致しないので書かずにおこう。

私が言いたいことは、日本語で思考することと英語で思考することとの質的な差である。「血圧が高いから、血圧自体を高くしている原因を探り、それだけを治す薬を開発して血圧を下げる治療をしよう」これが（西洋）科学の方法論である。しかし「血圧が高いのは、身体全体のバランスが失われた結果なので、全てのバランスを正常に戻して、その結果として血圧も正常に戻そう（血圧だけを下げることではなにも解決しない）」あるいは「血圧が高くても、それ以外のものとのバランスがとれていれば健康である」と考えるのが東洋科学の思想である。だから、身体の調子を整える漢方薬があり、ツボを刺激する針治療や指圧がある。漢方薬には、具体的にどこの何に効くといった効能は謳（うた）われていない。それは至極当然であり、結局、全体としての整合性を議論しようという立場が東洋思想の根幹にあるからしかたない。だから面白いのは、「血圧に効くツボ」は血圧の低い人にも高い人にも効果があるらしい。これは、血圧を直接的に調節するのではなく、身体の状態を整えた結果として血圧も正常に戻るからなのだろう。特定の疾患、特にガンとか心臓病とか、に対して西洋医学は莫大な貢献をしてきたし、逆におそらく東洋医学はほとんど無力だった。しかし、特に生活に密接に関わる病気（病気とは呼べないような病気）に対しては、西洋医学の治療ではむしろ身体全体のバランスを乱す可能性すらある。西洋医学的な意味で検査の値が基準値からはずれているとしても、全体として絶妙なバランスをとって健康でいる例などいくらでもある。しかし、その血圧だけを下げる治療をすることによって、他とのバランスがとれなくなり、重篤な病気を引き起こすこともあるだろう。たとえば、高齢者に関して言うと血圧は極端な高血圧群（平均 183 ／ 93）でなければ余命に差はなく、むしろ降圧剤を使用することによって目・脳・腎臓にダメージを与える危険性すら指摘されている。また血糖値の高低では余命にまったく差はないどころか、糖尿病の患者の方が結果としてアルツハイマーにかかりにくいという統計値がある。ということは、少なくとも高齢者に関しては血糖値がかなり高い値を示していてもボケないで同じだけ生きることができるということなのである。さらには、少なくとも高齢者に限っては、喫煙者と非喫煙者の間にすら余命の差が認められない上に、心筋梗塞や肺ガンの発症率と喫煙・非喫煙の間に因果関係を示すデータがまったく見られないというのだ。もちろん、このデータだけをとって全てを議論する意味はない。しかし、それと同様に血糖値・血圧・喫煙の有無だけのデータから議論をすることも危ういのである。結局のところ、最下位の要素から全てを説明しようとするのが西洋科学であるのに対して、全体性（要素の関係性）を基準として説明しようとするのが東洋科学ということになる。これは、どちらが正しくてどちらが間違っているという議論ではない。強いていえば両者ともに正しいが、視点が違っているにすぎないのである。

英語の感覚では「個」が意味を持ち、その集合として「社会」ができるのに対して、日本語の感覚では「社会」の中に「個」がある。もちろんどちらも間違ってはいない。ただ、内線電話を「内線」と潜在的に認識しがちな思考（論理）体系を持つか、「拡張 extension」と認識する思考体系を持つかによっ

て、ものの考え方は 180 度異なるのはきわめて当然のことなのである。extension と呼ぶ以上は、英語を母国語とする人たちは内線に電話を切り替える時には、どんどん新しいところへと開拓していく感覚でいるのだろう。私は、内線に切り替えられるたびにどんどん小さな部署に回されているイメージを持ってしまうのだが・・・。端的に見て、世の中は個から出発するのが西洋思想である。封筒の宛名には、まず真っ先に個人の名前を書き、次に家族の名前（姓）、番地、町、市区、県、国・・・・と無限に続けられる。この思考体系だからこそ絶対唯一の創造主が存在しなければならないのは個人的にはすごく納得できる。これに対して、日本ではどの仲間に属しているのかが問題になる。新しい人と話す時には、ついつい「戸籍調査」をしてしまう。共通の友人を捜し、出身地や生年月日・出身大学などに共通性を探す。人よりも、その人の所属していた社会に重きが置かれるのである。日本人は昔から、相手の住んでいる地域を知ることで安心し、家柄を重んじることで精神の安定を保っている。だから、郵便物を送る時には大きな集合から始まる。普通は都道府県から始まり、自分の名前は最後の最後に出るのである。何をするにも、まず集団を決めなければ何も始まらないのだから、日本には八百万（やおよろず）の神々がいらっしゃるのだろうし、どんな物事にも疑問を感じることもなく敬意を抱けるのであろう。これらは「習慣の違い」ではない。あくまでも思考体系・論理体系の違いにより必然的に生じてきた結果なのである。お米の一粒一粒に神様が宿っているという感覚をなんの疑問もなく受け入れられるのは日本語のおかげなのだろう。だから「客観的な事実は誰が見ても同じ」ではない。どの言語体系を用いて思考するかによって事実が異なるのである。

これを物語る面白い話がある。西洋人は、人間として（夫として、親として、友として）果たすべき義務を怠ったことで自分を責めるのに対し、日本人は周囲への迷惑や世間体を第一に考える。だから、西洋人は自分が許せないからと自殺を考え、怖いからと自殺を思いとどまるし、日本人は周りに迷惑をかけるから自殺を考え、周りのことをおもんばかって自殺を思いとどまるのだそうだ。精神医学者の木村敏氏によると、西洋では個の主体性が中心であり、独立した主体同士の相互交流として対人関係が意識されるのだが、日本人の場合は、個と個の関係（間柄）が最初に強く意識されるらしいのだ。集団の中での関係性が全ての価値基準になる場合には、関係性において個を相対化できるが、独立した絶対である個は相対化できないため存在として危うい。だから個を相対化するためには、絶対的な神と直接つながっていなければならないのかもしれない。これに対して関係性はあくまでも周囲との相対性に置いてしか議論できない。したがって絶対的基準にはなりえないので、日本人にとっては人が自分をどう思っているのかが判断基準になるのである。言ってみれば西洋思想の根幹は「自分という個人」「相手という個人」などに完全に重きを置いており、日本思想の根幹は「人と人との間（すなわち関係性）」という見えないものに重きが置かれる。この違いはまさしく言語構造の違いに等しい。すべてにおいて個から始まる言語体系と、集団から始まる言語体系の違いなのである。人を指し示す言葉として日本語では「人間」、英語では“human being”というのはきわめて象徴的であろう。

ホームページ上に日本語と英語のページを載せることがある。その際には、日本語と英語の両方で同じことを表現しなければならない。その時に、日本語を直接英語に訳すとまったく読みづらい文章になる。同様に、たとえ自分が書いた英文でも、それを日本語へと逐語訳（ちくごやく）をすれば読めたものではない。だから、先に書いた文章に引きずられることなく、その言語で初めから書き始めることになる。すると、両方とも私が書いているのであるが、導入部分から始まって話の展開まで両者はほとんど共通点のない文章になるが、両者共に本質的に言いたいことを言えている。訳本が読みにくいのは今に始まったことではないし、英語とドイツ語やドイツ語とフランス語などの間で翻訳されたものでも、非常に読みにくいらしい。ものによっては、訳本を読むよりも辞書を引きながら原書を読む方がはるかに早い上に理解が深い場合がある。これは私に英語力があるからとは考えないで欲しい。当たり前だが、英語を読む方が日本語を読むよりも何倍も時間がかかるのだ。も

しもその著者が日本語も使えたなら、間違いなく原書とはまったく異なる日本語版を書くことであろう。もっと卑近(ひきん)な例を見るとわかりやすい。高校のリーダーの授業では全ての文章を一字一句間違いなく逐語訳していく。そして、その訳文は文法的にはきわめて正確に訳されているはずである。しかしその訳文を並べて日本語で読んだ時に意味を理解できるだろうか考えて頂きたい。これほど読みにくく意味不明な文章は他に探せないに違いない。もし高校生に、この意味を聞き取らせて日本語作文してもらうと、わかりやすい日本語であればあるほどに元の英文とは違う構成の文章になっているはずである。特定の言語で思考することは、その言語特有の流れがあり、別の言語で同等の論理展開をさせることは難しいのだ。思考とはかように言語へ依存しているのである。

人との関係性を重んじ、そこに判断基準を求める日本人の思考体系は、「競争社会」に似つかわしくないと感じる。本当の意味での民主主義・資本主義・自由競争原理などはすべて（絶対神との関係における）絶対的個人に判断基準を持つ西洋から生まれた。「権利」「義務」の思想は、個を重んじる論理（社会）体系においてのみ確立するし成熟することは非常に納得しやすい。自分も相手も絶対個として理解し尊重しようとするから、反社会的行動をする人の人権も必然として考慮される。それに対して、「出る杭は打たれる」的思考体系を持つ日本社会は、人と人とのつながりを安定に保つことを尊重するのだから、反社会的行動はすなわち排除すべきあるいは糾弾されるべきものとして認識される。しかし、ここに「先進の考え方」として西洋の「絶対個を尊重」する思想が形式的に導入されたから社会そのものが混乱をきたしている。日本社会は年功序列という独特の雇用体系を生み出した。個の権利や義務で集団を安定させるのではなく、集団の安定のために個が思考するシステムを築いてきた。どちらのシステムがよいとか悪いとかの問題ではなく、このような日本社会に「グローバル化」と称した欧米の個人主義が導入されることに違和感を覚える。個人主義や競争社会を受け入れる土壌がそもそも個人の水準で日本人は持ち合わせていないので、競争の考え

方だけが輸入されると歯止めのない、あるいはモラルが欠失(けっしつ)した社会へと変貌するのは当たり前の様に感じるからだ。人間としてすべきことを神との契約によって己に課しているからこそ個人主義が成り立つのだろう。ただ競争原理だけを押しつけるということは人との関わりを除去することに他ならず、これは人との関わりのみによって己の立ち位置を判断する日本人にとっては、何をしてでも他人に勝たなければならない、自分さえよかったらそれでよいというモラルの欠如に直接的につながると感じる。モラルを失った日本人が最終的によりどころにできるのは「法律」しかなく、他人の行ないを注意したら「おまえになんの権利があってそんなことを言うのだ！」とか「法律に触れていないからよいのだ！」となる。神も信じられず、人間関係すらも崩壊させた日本人・日本社会はこの後どうなっていくのだろうか？

もうひとつの問題として、思考体系を言語が決めているという論理から考えると、不完全な言語による思考はきわめて不完全であると言わざるをえない。「っていうかあ、なんかむかつくしい、ちょーうぜえんだよな」と話す時､思考は存在していない。言葉に変換しなくても構わないから、その「ちょーうぜえ」の正体が何なのか一瞬でも思考すればキレることはないのだろうと思う。その思考力を担保する言語がきわめて不完全であり不安定なのだから、思考など及ぶはずもなく、したがって瞬間的に脊髄反射の様にキレるのだろう。体系とは、必ず収束しなければならない。決して放散してはならないので

ある。論理とはそもそもそういうものなのだ。その論理が自己の中で収束しきれず、途中で収拾不能になった時にキレるのだろう。だから、キレる子をなくすためには「思想教育」ではなく「国語教育」をすべきだと、きわめて個人的な意見であるが真剣に思う。

この論理のついでに、話が横道にそれるが、私が学生と議論する方法を書いておこう。まずは大きな紙を用意する。私は使い終わったカレンダーの裏をよく用いている。これを前に置き、赤青鉛筆あるいは何色か出るボールペンなどを手にして議論を始める。なんでもよいから話し始めた時にその紙に何かを書く。議論を進めながら、次々と展開する事柄をその紙に書く。この時、前の議論との関係性を明確にするために、前に書いたものといま書くことの間を議論の過程がわかる様に矢印などを用いてつなぐ。文章ではなかなかイメージは捉えにくいだろうが、まあ、議論の終わりにできあがったものを見たら曼茶羅（まんだら）の様に見える。この様に議論の流れを図に画き表わすと、全ての議論が互いに関係性を持ってつながるのである。まさに曼茶羅の様に、議論の展開からは想像もしていなかったところが実はつながっていることに気付き愕然とするのである。議論は論理である以上、必ず互いにつながりあって閉じる。解放し、放散していくのは論理ではないし、何かがおかしいのである。この方法で大切なのは、前の議論を書き残しておくことである。だから黒板やホワイトボードでは意味をなさない。何十分も前に話した議論など普通は頭に残っていない。しかし、最終的に見えてきた議論が、その何十分も前に議論した事柄と密接に関連していることは、全ての議論を残しておかないとわからない。そして、このような方法論によって、議論を始める前には私も学生もまったく想像だにしていなかった新しいものがどこからともなく姿を現わすのである。要するに議論とは、今まで既に持っている知見（要素）を並び替えて脳の中に新しい論理体系（かたち）を作り上げるための最も優れた方法論なのである。だから、自分よりも知識のない人と議論をしても、相手の意見をしっかりと理解する努力をし、自分の意見を相手に理解してもらう努力を繰り返すうちに、今までにも知っていたけれど気付いてなかった新しいアイデアが突如出現するのである。だから、ディベートではまったく意味をなさない。相手を言い負かすことには何も意味はないのである。勝ち負けを意識する時点で、議論の出発点が目的になるからである。

話を元に戻そう。「少なくとも小学校レベルで勉強のできる子は国語のできる子である」と小学生を教えている塾の先生は言うそうだ。これはきわめて納得できる。国語能力とは思考能力のことであり論理能力のことであるから、言語能力なくしてさまざまな論理を理解できるわけがない。国語力がなければ理科や算数に社会を理解することができない。だから、逆に他の成績がよい子どもは国語の成績もよいとも言えるのである。小学校で英語教育を強化するらしい。英語教育こそが国際競争力なのだと。これまた個人的な意見だが、国際競争力を付けるには思考能力を付ける以外に道はなく、そのためには英語ではなく日本語（作文能力と読解能力）をしっかり身につけさせるべきだと思う。

ちなみに、私が受けてきた国語教育にはほとんど意味はないと感じている。現在行なわれている国語教育のことはまったく知らない。あくまでも 25 年以上以前の話である。私が子供の頃の国語の時間には、お役人が「素晴らしい」と感じる思想・信念が書かれた文章しか読まされた記憶がない。いま思うに、これなら国語教育ではなく思想教育であろう。文章を読み解く力が教えられるのではなく、その思想にいたる信条みたいなものの教育になっていた。決定的に問題なのは、日本語を書く技術が一瞬たりとも教えられなかったことである。読点を打つ場所を教えない、あるいは「息継ぎのところで打つ」なんて非論理的なことを教える。「橋本は血だらけになって逃げる山崎を追いかけた」という文章で、読点がないから橋本と山崎のどちらが血だらけなのかわからない。「橋本は、血だらけになって逃げる山崎を追いかけた」あるいは「橋本は血だらけになって、逃げる山崎を追いかけた」にすると意味は明瞭になる。もっと言えば、前者の意味にしたいのなら「血だらけになって逃げる山崎を橋本は追いかけた」とすれば読点など必要ない。このくらいの作文技術

を教えずしてなにが「小学校から英語教育」なんだか、本当に神経を疑う。

よく、「語学をもう少し勉強していれば・・・」という言葉を耳にする。言いたいことはわかるし、意味のない揚げ足をとりたくもないのでいつも聞き流すが、「言葉の習得（使いこなせる様になること）」と「語学（その言語を学問的に分析すること）」とは異質のものである。日本人が日本語を対象とすることも語学の範疇に立派に入る。しかし、一般に言われる「語学」とは、「学問」ではなく「技術」であろう。ここで、このような細かいことにこだわる必要はないかもしれない。しかし、あえてここで言いたいことは、語学という言葉の裏に隠れている意味である（日本人は「言霊」と呼んでその重要性を認識していた）。ここまでも繰り返し議論したが、言語とは固有の体系（システム）であって、その体系をそのまま受け入れること以外に外国語を習得する道はない。その体系が紡ぎ出す感覚をつかみ、それを自分の脳にインストールするしかないのである。語彙を増やすのはその後で構わない。これに対して語学はまったく異なる。私は理科の研究をしているので、まあ、理系の人間であろう。その私が、一日中英語と格闘している。学術論文は全て英語で書かれているので、取り入れなければならない知識は全て英語を読むしかない。研究成果の公表も英語の論文を書く以外には方法がない。私たち理科系の研究者は日本語でいくら文章を書いても誰も認めてくれないのである。個人的に知らないので不確かな情報になるが、英文学の研究者は私たちほど英語を読まないし書かないらしい。論文も日本語で十分通じるそうだ。だからどちらが偉いという議論ではない。要するに、語学（すなわち、特定の言語を分析の対象とする学問）はこういうものだと言うことである。だから、細かな文法にこだわることが重要な場合もあろうし、日本語との比較においてのさまざまな学問的知見を得ることも重要であろう。しかし、それを研究するには、それ以前にその言語を使えなければならない。その言語を読めない・書けない・聞けない・話せない人がその言語の学問的探求などできるはずがない。もちろんこれは一般論なのでこれ以上議論するつもりはないし、その意味もないが、言語を習得することと、文法を理解することを混同している傾向はこの「語学」という単語にも表われているのである。

ところで少し唐突だが「イタリアン食べに行く」って表現がとても気に入らない。ただの「文句タレ」と思われてもしかたないのだが、「日本人」が「日本人を相手」に「日本語」で「イタリアの料理」を指して、イタリア語でいうならまだしも、なぜに英語で表現するのだろうか？日本語で「イタリア料理」や「フランス料理」の方が断然よいと思う。なぜに「フレンチ」？英語ってそんなに格好いいかなあ？それとも日本語がそれほど格好悪いのだろうか？とても不思議である。

しっくりくる日本語って大切だと思う。ア・プリオリを日本語で言いたいけど、しっくりする日本語がない。辞書で引いても「先天的」とか「先験的」とか書かれているにもかかわらず、「日本語に訳すと元の意味からかけ離れるのでカタカナで表記することの方が多い」などと書かれていたりもする。すなわちア・プリオリは立派に日本語（外来語）として成立しているのである。たとえば「レストラン」という言葉を考えていただきたい。日本語に訳せば「食堂」だろうか？それとも「食べ物屋さん」だろうか？しかし、どの日本語を選択しても「レストラ

※２：ゲシュタルト【（ドイツ）Gestalt】
《形態・姿などの意》知覚現象や認識活動を説明する概念で、部分の総和としてとらえられない合体構造に備わっている、特有の全体的構造をいう。形態。
『大字泉』より

※3：ひらがなやカタカナも漢字から派生したので、大和言葉も外来語（漢字）の影響を受けていると考えられるかもしれないが、そもそも漢字から仮名が成立した背景には意味的な因果はまったく存在しない。大和言葉の各音に近い音を持つ漢字を選び、その図形としての形態を崩して簡略化したものが仮名となったにすぎない。あくまでも音を表わす記号として仮名が用いられたのである。これに対してたとえば山という漢字は、「やま」という大和言葉が指し示す意味に近い中国語をそのまま輸入したものである。したがって中国では決して「やま」とは発音しないので、日本語の漢字には音読みと訓読みが存在するのである。

ン」の意味にはならない。したがってレストランのような言葉まで全て日本語で表記するべきだと時代錯誤の主張をするつもりは毛頭ない。ゲシュタルト※2も同じことで、この言葉でしか表現できない意味があるのだからゲシュタルトは日本語として用いても構わないと思う。日本語は、もともと大和言葉なのに、いまでは中国語（漢字）※3を抜きにしては成立しないから、外国語を取り込む能力（寛容性）に優れた言語だったと思うし、その言語を話す日本人も、他人の気持ちや自分とは異なる価値観を受け入れることのできる国民だと思う。外来語を取り入れることはむしろ日本語の誇りにしてもよいかもしれない。だから、全てを大和言葉で話しなさいとは言うつもりなど毛頭ない。必要な外来語は使うべきだし、それを使いこなせるのが日本語の特徴なのだから。でも、「イタリアン」や「フレンチ」を使ってはいけないと思う。イタリアンレストランとイタリア料理店の間に意味としての差異はない。そこに敢えて英語を用いることは、言語が植民地化されているとでも言えそうなくらいの自虐的欧米主義に洗脳されている様にしか思えないのである。老人社会と言いながら「バリアフリー」とか「コンセンサス」とか、お年寄りには理解できないカタカナが町にあふれている。日本語の会話の中に英語を入れる方が賢そうに見えるとでも思っておられるのかもしれないが、「っていうか～、なんか、うぜえじゃん」と話す若者とまったく違わない様に感じられてしかたない。日本語にそもそも存在する言葉を英語のカタカナ表記にする意味が理解できない。自分たちの思考のよりどころである日本語に、ここまで劣等感を持つ理由はどこにあるのだろう？このような言葉の使い方は、自らを思考停止に誘うのではないだろうか？

第二次大戦後、ハリウッド映画の素晴らしい世界がスクリーンに映し出された。テレビドラマも、「わんぱくフリッパー」や「名犬ラッシー」に「奥様は魔女」、あるいは「コンバット」など、アメリカの素晴らしい「幻想」を無批判にたたき込まれた。アメリカは理想の国である、みたいな感情が無意識のうちに根付いた様に感じる。学校給食がパン食になり、意味もわからずにアルファベットで書かれたものを珍重する様になった。町の看板で日本語とローマ字ではどちらが多いのかわからないくらいである。日本人は無条件に「アメリカには敵わない」と深層心理にたたき込まれた。この様に「アメリカが最先端」だと洗脳されたツケがいまになっても根強く残っている気がする。占領地・植民地政策で最も重要視されるのは言語政策である。思考にとって言語がいかに大切かを知るからこそ採択される戦略である。「グローバルスタンダード」って言われるけど、それは「アメリカンスタンダード」にすぎない例は星の数ほどある。「欧米では」と枕詞に付ける評論家など、無意識に「日本が劣っている」と信じているのだろう。それを疑問に感じない程に国民も自虐的になっている。

しかし、なぜこの様にアメリカを受け入れる様になったのだろう。もちろんアメリカの政策が奏功（そうこう）したというのは間違いなくあるだろう。ただ、日本語の「かたち」にもこの原因があるような気が少しする。今のアメリカに相当するのは、昔は中国であった。平安時代のエリートは文章を全て漢文で書いているし、漢文で書くことこそがエリートとしての証だったのだ。時がたち、現在にいたっては、日本語の書き言葉には完全に外来語の漢字が無くてはならない状態になっているではないか。これらも、日本語の「かたち」が多言語の要素を受け入れやすいのではないかと考える。一度、漢字を輸入した経験を持つ日本語であるから、語尾に「さ」を付けたらどんな外来語でも名詞にでき、「な」を付けたら形容詞で「に」を付けたら副詞にできる方法を編み出し

てしまった。だから日本語は、外来語を非常に簡単にその構造の中に取り込める。そして、そのような言語によって思考している私たちは、その思考体系が、多くのものに対してきわめて寛容にさせているのだろう。よくも悪しくもこれが日本語、ひいては日本人の思考体系の根幹なのである。

ここまでの文章では、言語が思考を一義的に規定するという内容になっている。これは一面では真理であるが、別の見方も同時に成立する。すなわち、言語の「かたち」は生活習慣によっても大きく左右されるということである。生活習慣は、国土の地形にも影響を受けるし気候にも影響される。それらが相関し合いながら日本社会の根幹ができてきたのだろう。しかし個人主義が広がり、これまで美徳とされてきた道徳観がなくなり、自由競争という名の下に繰り広げられる弱肉強食の社会が広がっていくと、日本語もその姿形を変えるだろう。それはそれでしかたないとするのか、やはり元の「美しい日本」に戻ろうと努めるのかは真剣に考えなければならないだろう。言語の乱れは、単に言語だけの乱れにとどまるものではないと思う。

「かたち」は閉じていなければならない。解放していれば論理体系として安定して成立できず、どこかで破綻をきたす。思考の根本となる言語体系も当然であるが原則として閉じている。しかし、たとえば外来語がどんどんと入ってくるし、あるいは若者言葉が一般に広まる様に、私たちの周りには新しい情報があふれている。その情報がこれまでのかたちの中に受け入れられる時に、そのまま体系に入りうる情報と、体系の一部が閉じられないかたちで入ってくる情報がある。この場合にはその要素が他の要素との関係性を築く様に己の体系を調整しなければならない。とはいうものの、このような単語などの要素が単純に新しく入ってくる場合にはかたちを大きく変える必要はない場合が多いだろう。しかし、読書や会話などによってこれまでまったく考えてもみなかった考え方に出会う。考え方や概念などは新しいかたちが己の体系に入ってくることを意味する。新しいかたちを受け入れるとは、今までのかたちとの整合性を新たに築かなければならない。そして新しい関係性が出来上がればその人にとって新しいアイデアが生まれることとなるのだが、新しいかたちを閉じて維持できない時に「悩み」が生じる。この「解放した体系」が枝葉末節（しようまつせつ）のところであれば些細な悩みとなるが、根源的に今までのかたちから受け入れられないかたちを取り入れたら悩みは深くなる。その結果として現体系の脱構築から新しい体系の構築へとつながる。大きな思想を作ろうとする時には現在の思想体系を完全に脱構築するしかない。思想体系の脱構築時にはきわめて不安定であろうことは容易に想像できるので、偉大な哲学者が日々悩んでいたのはある意味では必然なのであろう。

思考体系は、要素同士が関係性を構築した時に出来上がる。したがって、同じ構成要素から成っていても異なる関係性を構築すれば、異なる思考体系とならざるをえない。何かを見た時に瞬時に何かを考えるとしても、その感じ方は人それぞれである。それは個々に異なる体系をもってそれでさまざまな物事を判断しているからである。こう考えると、同じ人間の脳の中に異なる二つの体系が生じ、時に応じてそれらが切り替わった時にはまったく別の人格が形成されても不思議ではない。多重人格というのは結局のところこの様に捉えられるのかもしれない。

余談であるが、今の生活におおむね満足していれば、基本的な体系は安定に閉じているため思考としては保守となりやすいし、今の生活に満足できなければ思考体系がどこかで閉じきらず、したがって改革的思想を持つと考えられる。その日を生きて行く満足感を感じている人たちの間で保守政党が強く、リストラや低賃金などさまざまな不安や不満を抱えている人たちの間で革新政党が支持されるのはかたちの議論から考えてもわかりやすい。

ここまで、思考や感覚が使用する言語に依存することを論じてきた。次に英語と日本語の感覚について、いくつかの例を挙げながら比較することで、日本人が感じるニュアンスと英語を話す人が感じるニュアンスの違いを具体的に検討したい。

第二部・英語の感覚

言語とは脳にインストールされたシステムソフトウエアであるという観点から、英語の感覚について私見を書く。目的は、思考や感覚の多くが言語によっていることが多く、また言語は直接的に翻訳可能ではありえないということを日本語と英語の感覚を比較することで見ていこうというものである。だから、日本語で感じ考える感覚と英語のそれとは原則として相容れない場合が多いことを、実例とともに考察している。日本語と英語の感覚の違いを論じているので、必然的に英語の勉強の仕方を解説した文章にもなっているが、結果としてそうなってしまっただけのことであって英語の学習法をまじめに解説するつもりなど当初はなかった。

だから、英語の解説書としてみると、きわめて不十分であり、きわめて個人的で一方的な意見であることは重々承知している。したがってこの文章は他の考え方や意見を排除するものでは決してない事だけはご理解頂きたい。学問的に間違ったことをたくさん書いていると思うが、本人は至って真面目に「これが正しい」と思っている。思いつくままに書くだけなので、まったく系統立っていないこともあらかじめご了承願いたい。もし系統立って書くとすれば、英語の教科書を書くことになってしまうのだが、そのような能力など私は持ち合わせていないからである。もし私が一年間、大学生か高校生を相手に英語を教える機会でももてたら、その経験を元に系統立った内容を作り上げられるかもしれないが、幸か不幸か私は理科の研究者である。不十分な点はご容赦願いたい。また本文は全体的に「文法など必要ない！」といった流れになっているが、文法を否定する気など毛頭ない。ただし、本文にも書いているとおり、言語の設計図として文法が存在するという感覚は捨て去ってもらった方が英語の理解には近道であると思っている。なぜなら、文法より先に言語が存在しているからである。非常に綺麗な日本語を書く人が、日本語の文法を知らないことだってありうる。と言うより、そちらの方が普通ではなかろうか。言語の習得と文法の理解とはまったく次元の異なることなのである。

多数の言語を見事に操る人はまれに存在する。どんな言語でも、短い時間ですらすらと使える様になる、ある意味での天才である。私などから見ればとても不思議なのだが、別に記憶力がよいのでもなさそうだ。単語を人よりもたくさん一気に覚えられるわけでもない。では、なぜ新しい言語をその様に簡単に覚えられるのだろうか？それはおそらく、言語全体のパターンを瞬時に認識する能力を持つのであろう。パターンとはもちろん「かたち」のことである。文法が一所懸命に説明をしようとしている言語の本質的なかたちを直感的に取り入れる能力に秀でているのだろう。だから、細かい文法など必要はない。最小限の言語の成り立ちを理解した途端に、脳の中に新しいシステムがインストールされる。その瞬間に、脳はその言語の環境になる。その環境に語彙を増やし、さまざまな表現を要素として入れ込む。するとその要素はすぐに意味を持つことができるのである。しかし、文法から言語を理解しようとすれば、新しく入ってくる要素（たとえば単語であり熟語である）が脳の中で意味を持てない。なぜなら、その言語の文法を日本語によって理解しているわけで、したがって脳の中にはその言語の「かたち」ができないからなのである。だから、日本語の環境に外国語の単語を要素として加えているにすぎないのである。日本語環境で理解しているその言語の文法に、その単語を無理矢理入れ込もうとするが、そこに体系は存在しないので、その要素も意味を持つことができない。余談だが、「ナイターはカタカナ英語で通じない。本当は night games. だ」とか「ペットボトルは通じない。plastic bottles. だ」などという指摘は揚げ足取りでしかない上に、これらを覚えたからといって何も変わらない。日本語でも地方によって使う単語の意味は異なるし、それを全て覚えられるはずはない。地方に引っ越して、いままで使っていた言葉の意味が違う様に使われているなら、その時に覚えればよいし、その言葉の意味を知らないからといってその人は日本語を話せないとはならないだろう。言い回しの違う言葉なんて山の様に存在する。それをひとつひとつあげつらってもなんの意味もないのだ。

アメリカのスーパーでレジの女性に 12 月半ばになると“A merry Christmas.”と言われ、クリスマスをすぎると“A happy new year!”と言われる。これらのことばの前には I wish you が隠されているのである。すなわち、「よいお年（クリスマス）をお迎えください」ということなのだ。日本語の感覚とはおそらく決定的に異なるだろうし、これはこのまま頭に入れるしかない。この言葉と、それが指し示す状況を結びつけることこそが重要なのであって、日本語にある近い概念と対応させることが重要なのではない。要するに、文法を学ぶことや単語や熟語を日本語の感覚で学習することは「日本語の体系において外国語を理解するとこと」であり、言語を習得すると言うことは「その言語が持つ固有の体系を脳にインストールすること」である。もっと言うなら、全ての言語が持つ固有の「かたち」をそのまま、己の言語の「かたち」を介さずに、脳に入れ込むことが言語を習得することなのであろう。

文法とは何か

一般論としての「文法」とは何かを考えてみる。たとえば文法を意識して日本語を話す日本人はまず絶対にいない。「俺は、その学会には行かない」と話す時と、「俺は、教授の子分ではない」と話す時、「～ない」について、前者が助動詞であり、後者が形容詞の述語であると意識など少なくとも私はしていない。「その学会には行か俺はない」とはできないのに対して、「教授の子分では俺はない」とできるからだそうで、形容詞の述語の場合には大阪弁の「ちゃう（俺は教授の子分とちゃうねん）」が使えるのに対して助動詞では「ちゃう」は使えないことからも明快なのだそうだ。しかし、その意識をすることによって日本語をよりよく話せる様になることはありえない。「行く」は五段活用である（らしい）。どの様にそれを判断するのか？「行く」に「ない」を付けた時に「行かない」となるから五段活用となる（のだそうだ）。しかし、考えてみて欲しい。日本語を話せない人間は、「行く」に「ない」を付けたら「行かない」になることを知るはずがない。「文法」とは、すでに日本語を話す能力を有する人間が、その論理の仕組みを探ろうとして試行錯誤していることなのである。だから、動詞の活用をすべて暗記して、話す時に「{書く} は五段活用だから、{ない} を付ける時には {書か} としなければならないので・・・・・」。これで日本語の会話ができるとは思えない。そもそもからして本末転倒である。そして、日本における英語教育はまさにこれを行なっている。

進行形の感覚

時制について考えてみよう。「彼はいま野球をしています」と言っても、これが「いま、グランドに立ち、バットを振り、ボールを追いかけ、まさに野球という競技を行なっている瞬間である」という意味にはよほどの場合を除いてはなりにくい。それは、日本語には英語の現在進行形に相当する時制がなく、したがって、私たちは現在進行形が表現する感覚を意識できないからであろう。逆に言えば、英語を話す人たちは、話すごとに無意識にこれらの時制の感覚を感じているはずである。～ing がつけば、意識の中に「非常に短い時間の経過」を認識している。「微分」的な時間の感覚を無意識の中に意識して、～ ing を使っているはずである。何秒という「長い」時間ではなく、一万分の一秒よりもはるかに短い、「瞬間」にも等しい短い時間が連続した感覚でものを言っている。一瞬一瞬の動きを躍動的に表現している。だから He is playing baseball. と He plays baseball. は絶対的に異なる。しかし、日本語に訳すとその明確な違いが消えてしまう。「ああ、あいつか。あいつはいま外で野球してるよ」という日本語には、野球という動作をまさにこの瞬間に躍動的に行なっている生き生きとした感覚は含まれない。「している」という日本語は、その状況を表わすにすぎず、時間軸を伴った躍動的な動きを決して表わさないからである。「著者の主張は第３章に書かれています」が進行形ではないことは一目瞭然であろう。こういうところを機械的に訳出させ、それを減点法で採点することに意味があろうはずがない。日本語も自由に操れるアメリカ人が、英語の現在進行形（現在分詞）を日本語で説明する時に、「生き生きとした雰囲気を出したい時に使う」と言うことがある。その動作をしている感覚の中に時間軸が含まれることを日本語で表現する場合には「生き生きと」とするしかなかったのだろうし、このような表現こそが最も理に適っている。

Knowing is believing. を To know is to believe. と書き換えても同じ意味だと習った。ありえない。かたちが異なれば、意味は必ず異なる。～ ing を用いている時の話者は、その瞬間にきわめて短い時間感覚をイメージしている。だから、Knowing は「今、この瞬間にあなた（私）が知っているという、まさにそのこと」を意味する、あるいは「まさに今、この瞬間にあなた（私）が知ろうとしている状態に突入していること」を意味するのである（この説明の日本語でもたどたどしいのは、日本語にこのような表現感覚がないので、くどくたどたどしい説明にならざるをえないのである）。だから、Believing、すなわち「まさに今、あなた（私）が信じていること」あるいは「まさに今、あなた（私）が信じようとしている状況に入ったその状態」なのである。それに対して、To know は感覚的にまったく違う。To ～は、「その方向へ」という意味を持ってしまう。物理的な方向もそうだし時間的な方向もそうで、「何かに向かって」という意味合いがどうしても付く。動詞に付こうが名詞に付こうが同じである。最初に上げた日本語の「～ない」と同様に、英語を話す人たちがその文法的な違いを意識しているとは思えないのである。だから I went to the station. は「駅に行った」となり、Go to the dictionary. は「辞書を引きなさい」となる。どちらも意識としては「そちらの方に向かう」ニュアンスを保っている。なので To know は、「（いまはまだ知らないけれど、これから）知るってことは」というニュアンスになるし、したがって to believe は、「（将来的に）信じること」になる。したがって、I want（私は欲している）に続くのは to ～になるのは当然なのである。いま、それを持って（やれて）いないから欲するのである。逆に、いまビールを飲んでいる時に「ビールが好き」と言いたい場合には、I like drinking beer. でなくてはならない。I like to drink beer. は、その時にはビールを飲んでいないのだ。当然のことながら、そのニュアンスを持った上でビールを飲みながらあえて to drink と言うことはありえるかもしれないし、今、目の前にビールが置かれているのに飲めない「おあずけ」状態にいる話者が I want drinking beer. と言えるかもしれないが（たぶん言えないとは思う）、それらはその時の話者の感覚で to と ing はこの様に異なっている。I am looking forward to seeing you soon. の感覚はもうご理解頂けるであろう。また、I will wait for you at the station. と I will be waiting for you at the station. の感覚的な違いもわかって頂けると思う。前者は単に待ち合わせの約束なのに対し、後者は「会いたくてしかたない」というニュアンスがこもっている。つまりはこういう事なのである。

英語の先生に、「間違ったら通じない」とよく言われた。しかし、「通じない」のではない。「通じ」る。しかし、非常に気持ち悪い、不思議な感覚として「通じて」いるのである。機械のスイッチを入れるのを turn on と表現すると習った。むかし、チャンネル（ダイヤル）式のスイッチを回してつけたからである。今どき、「チ～ン」と鳴る電子レンジは少ないと思うのだが、「レンジにかける」ことを「チンする」という。これと同じだろう。また「し続ける」ことを keep ～ ing と習った。そこで、「その機械をつけっぱなしにしておいて」というのを Keep turning it on. というと、意味は理解してもらえるだろう。が、聞いている人は不思議な、背中がぞわぞわする感覚に見舞われる。なぜか。まず turn は「回す」という意味だからである。だから turning となると「回す」に時間軸が加わる。そして、その「時間軸を伴った、回しているという動作」を Keep（維持、持続）するのだから、「機械の前にいて、ダイヤルをずっと手で回し続け、その機械のスイッチを入れ続けておいて」と聞こえるのである。ここでわかる様に、Keep には、力（労力）を伴ってそれを維持するというニュアンスがあるのもこのおかしさを醸し出している要因のひとつである。Keep を使う限り、その人はずっとその場で機械に何かをし続けていなければならないからであるが、実際には機械が勝手にスイッチの入った状態でいてくれさえすればそれでよいのだから。では、どういう表現が適当なのか。おそらく Leave it on!! だろう。Leave は「そのまま放ったらかしにする」という意味で、「放っておいてくれ」はご存じの通り Leave me alone. である。だから、その機械（it）をスイッチ

が入った状態（on）で放っておいてくれ（leave）でよいのだ。もうおわかりだろうが、「スイッチを入れる」という意味での turn on は、最初にスイッチが切れている状態が前提になければならない。今、スイッチが入っている機械を turn して on にはできない。「（今朝、電車が混んでいて）立ちっぱなしだった」を keep standing で表現すると不思議な状態になる。keep は、「何かの労力をかけ続けながらその動作を維持させる」ので、standing は「(座った状態から)立ち上がる」という時間軸を伴った動作を示すことになる。想像して欲しい。朝、混雑した電車内で、立ち上がり続けている友人を。

英語を習得する方法論として、英語の感覚を身につけるために、その根本のニュアンスまでも含めて徹底的に体感するべきだと考える。「英語を話す人はこういう風に感じているんだ」と、日本語でよいから頭ではなく身体で理解するのが手っ取り早いと感じる。頭（理屈）で理解しようとすることは、日本語の論理体系で英語を理解することに他ならない。重要なのは He is playing baseball. は「彼は、いま、まさに、ボールを追いかけて野球を楽しんでいる、その動作の瞬間にいる」という風に徹底的に感じることである。to が付けば、とにかくその方向に向く意識をもち、ing が付けば瞬間的な短い時間中に動作が続いている感覚をとにかく感じる様に努力する。

この感覚を理解すると、He stopped to smoke. と He stopped smoking. の意味など簡単にわかる。構文で覚える必要などない。to smoke でわかることは、「彼は、その瞬間にたばこを吸っていない」ことである。だから、たばこを吸うのを止めたのではありえない。では何を止めたのか。その時にやっている何かを、たばこを吸うという目的のために止めたのである。だから普通には「たばこを吸うために立ち止まった」と訳す。しかし、その時に別のことをしていたのなら、それを止めたのである。それは文脈によって判断するしかない。すべて「立ち止まった」と機械的に訳せば意味は時に破綻する。これに対して smoking は、その瞬間、まさにたばこを吸っているのである。だから、止めるべき行為は「たばこを吸っていること」以外にありえない。だから、現在の行為～ ing を止めて近未来の行為 to ～をするという意味で、丁寧に言えば、「たばこを吸うために立ち止まった」は He stopped walking to smoke. とすべきであろう。ここで注意してもらいたいのは、話者は to smoke と smoking を選別しているのではないことだ。たとえば、forget ～ ing は「～したことを忘れる」という意味で、forget to ～は「～をし忘れる」意味であるのはもう十分に理解できると思う。では、話者はこの二つをどう選別するのかといえば、そんな選別などしていないとしか言いようがない。「おい、～し忘れんなよ！」と声をかける場合、Don't forget to と言ってから to の次の言葉を探す。言いたいことをど忘れしても、Don't forget to to to to ・・・, oh, what should I say? である。to が規定する範囲で次の言葉を探しているのである。Don't forget と言ってから「あれ？ to だっけ？それとも ing だっけ？？？？」なんて悩むことなどは絶対にありえない。考えてみれば当たり前で、話す順序通りに次々と単語が選択されていかなければ会話なんて成り立たない。後の chicken に引っ張られて前の冠詞が選ばれるなんて言語が淘汰されずに残ってくるはずがない。

I am going to go. は「よし、そろそろ行くわ」くらいの意味だろう。go という方向（to）に going しているのである。だから近い未来を表現できるし、その行動をするという意志が伴うこととなる。ちなみに、I am going. でも似たような表現

になる。この場合は、これまで見てきた様に「私は、今まさに、go しているところです」となるが、現時点ではまだその場にいることは明確なので、go している動作にまさにいま入ったところである位のニュアンスとなる。だから、「進行形で近い未来を表わすこともある」と辞書に書かれているのである。厳密には、I am going to go. は I am going よりも感覚的には少し早い段階である。日本語で強いて表現すれば、I am going to go. は「俺、帰ってもいいかな？誰か俺に用事あるかい？」位の感覚だろうし、I am going. は「(鞄を肩にかけてまさに帰るための第一歩を踏み出したところとして）帰るわ。じゃあまたな」くらいの感覚だろう。ただ、話し手の微妙なニュアンスの問題であって、意味としてはほとんど変わらないし、どんな状況でも両方の表現共に使いうる。だから、be going to ～と will は決して同じ意味ではないし、「文中に be going to が出てきた」事に意識が持って行かれると本来の意味を失うことはご理解頂けるだろうか？ I am going to go. は I will go. とは決定的に異なるのである。ここまでを理解すると、He is dying. が「いま死んでいるところ」ではなく、「死にかけている」のだということは簡単に理解できる。「いま死んでいる」は「死んでいる状態」を表わす形容詞 dead を用いて、He is dead. である。ケンシロウの「おまえは既に死んでいる」は You are already dead. あるいは You have already been dead. なのである。

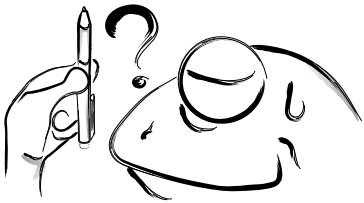
なにも日本語にすべてを訳す必要はないけど、日本語＝英語ではないことを意識して、「日本語を英語に変える規則がある」というふざけた考えを直ちに捨てることはきわめて重要である。その英語の単語や表現が内在するニュアンスを徹底的に感じ入れることこそが大切なのである。I love you. を「月が綺麗だね」と訳した明治の文豪がいた。その時の文脈によってはこれでよいのである。むしろ、いつもいつも「あなたを愛しています」と訳す方がどうかしている。

too ～ to は so ～ that で書き換えられると習う。バカを言うんじゃない。似たような表現になるかもしれないが、同じ表現になどなるはずがない。かたちが変われば必ず意味も変わる。ましてや too は基本的にネガティブな意味合いを持って使う言葉である。too much や too many は「多すぎる」のである。「とても多い」のではない。その後に to が続くのはもう理解できるだろう。話者が to ～しようと思っている（現在はまだしていない）のに、too ～だから「できない」のだ。too far to go は、「行くのには遠すぎる」から「行けない」。だから too が付けば、たとえ肯定文であっても否定的意味にならざるをえない。対して、so はたとえ単独で使わせる場合でもその底流には so が指し示す意味が存在する。そうでなければ、so ではなく very でことは足りる。so beautiful は「(～の様に）とても美しい」であって、たとえ She is so beautiful. で終わる文章であっても、その裏には that I can not believe my eyes. のような言葉が隠れている。だから、so の理由を受ける文章が肯定文であればもちろん内容は肯定的だし、否定文であっても so が指し示す内容は時には肯定的になりうる。so ～ that を too ～ to で置き換えられる、などと戯言（ざれごと）を覚え込ませるから、英語を話せないのである。話している瞬間に、「えっとお、｛書く｝は五段活用だからあ、ここではあ、｛ない｝を付けるとお、えっとお、｛書くない｝･･･違う違う、｛書かない｝かあ･･･」などと考えているから話せないのである。「あれ？たばこを吸うのを止めるは、stop ～ ing だっけ？ stop to ～だっけ？」などと、丸暗記した熟語や構文を思い出している間に会話は先に進んでしまっているのである。

be 動詞の感覚

be 動詞は、文法的解釈をすれば確かに「動詞」である。しかし、これを日本語の「です」と同じだと教えるのは、比較言語学的にはそれでよいのかもしれないが、大いに問題がある。This is a pen. を「これ　です　ひとつの　ペン」と教えても英語は理解できない。むしろ多くの人が気付いている様に、be 動詞は「等号（イコール）」の意味合いを持つ、日本語で言えば「助詞」的なのである。文法的には動詞のはたらきを示しているにすぎず、「です」なんて訳していると意味はわからなくなる。

be 動詞が含まれる英文を邦訳した時にできあがる日本語に用いられる動詞が「いる・なる・ある・です・・・」などとなるだけの話であって、こんな事を考えているから話せない。話者は、be 動詞の前後が等しいという認識で話している。それが過去の時には過去形にするだけのことである。だから、He was drunk. も「彼」と「酔っている状態」がイコールなのである。受身形を作る方程式として、「主語の後に be 動詞を起き、動詞を過去分詞にする」と教えられるが、それは結果としてそうなるだけのことで、I ate chicken. は私が鶏肉を「食べた」だが、鶏肉にしてみれば「食べられた」のであるから、chicken と eaten がイコールの関係になる（ただし、Chicken was eaten by me. などという英語は現実には絶対に使われないだろう）。この場合 eaten は、動詞の過去分詞としてのニュアンスよりも形容詞としてのニュアンスの方がはるかに強いし、現実に、過去分詞形が形容詞として使われるのは誰でも知っている。英語で自分の状態を表わす表現に受動態が多いのは日本人にとってなかなか理解できない点であるが、be 動詞がこのような性質として使われ、それが言語としての英語の大きな部分を占めていることを考えると、「オレは興奮している」を I am excited! と受け身の形になるのは理解しやすい。これは決して日本語で言うところの受動態なのではなく、あくまでも「（何かによって）興奮させられている状態」と「今の自分」が等しいことを示しているにすぎない。だから、「混乱している」は I am confused. だし、「興味がある」のは I am interested. なのである。あくまでもその時の状態と自分を等号で関係づけているにすぎないのだ。しかし、これは同時に受動態の文型であるのは間違いない。というか、受動態で「～された」と話す時と「自分は～の状態である」と話す時の文体が同じである。英語を話す人たちにとってこれら両者は切り離されるものではない。これは逆説的に考えると、日本語の体系がこの両者を明瞭に区別しているにすぎず、英語では状態を表現する時と受け身を表現する時の思考回路はまったく同じであるとしか言えない。だからうがった言い方になるが、英語によって成立する思考体系から「唯一絶対の神」が生じることはある意味では必然なのかもしれない。なぜなら、自分の感情を表現する時には必ず受動態の思考をする他になく、ということは「興奮する」のも「感動する」のも「驚く」のも「がっかりする」のも自己の意志によるのではなく、全ては「何か」によって間接的にさせられているとならざるをえないからである。ところで、I was there. では I と there は同じではない！と言える。there は at that place という前置詞を伴った意味合いなので「その場所を占有する物」と「私」が等しいと考えて I was the person at that place. とでも考えればいい。



「This」 「is」 「a」 「pen」 「.」
＝ ＝ ＝ ＝ ＝
「これは」「です」「ひとつの」「ペン」「。」

be 動詞が get に置き換えられることが多いのも納得できるだろう。get は、その物事を獲得するという動作のニュアンスを持つ動詞である。だからその状態を表わす be 動詞の代わりに get が使われると、その状態になるという動的な意志が加わるだけである。He got drunk. は「彼」が「酔った状態」を「獲得」したのである。その結果として He was drunk. となる。しかし、He was drunk. は、「彼」と「酔っている状態」が同じというだけなので、「ああ、酔った」という場合には、He got drunk. か He had got drunk. と言わねばならない。He is used to は「慣れている」のに対し、He gets used to は「慣れつつある」というのも暗記する必要などない。be と get の感覚をつかめばそれで十分なのである。現在進行形も、be ＋現在分詞ではない。ここまで見てきた様に、現在分詞（～ing）形はその動詞が表わす動作に微分的な時間感覚を与えている。その状態と主語がイコール（be）の関係にあるだけのことである。He was a poor boy. も、He was running. も、He was bitten. も、He was to see his home again. も、すべて「彼」

と be 動詞の後の状態がイコールであるというだけなのである（be ～ ing と be to ～の違いはもうわかりますよね？）。It is better left unsaid. も、そのまま読めばよいのだが、ついつい「受身形だから・・・」などとやってしまいがちになる。単純に、unsaid という状態に left するのが better なので、「言わぬが花」となる。もはや日本語になった感さえある made in Japan は「日本製」という意味なので、This is made in Japan. というと This と made in Japan が等しいとなるから「これは日本製です」として何も問題ない。これを構文で考える意味などまったくない。This book is written in English. も同じ事で、This book と written in English が等しいから「この本は英語で書かれている」となる。単純にそれだけのこと。どんなに複雑な文章でも、間違いなくこの感覚は守られている。

完了形の感覚

少しだけ完了形についても触れておこう。個人的には完了形を時制のひとつとして認識することに違和感を覚える。現在完了形はあくまでも現在形なのだと思う。その中で使われる動詞によって必然的に意味が異なってくるだけのことで、完了・継続・経験・結果などと分けることに意味を見いだせない。完了形は have ＋ 過去分詞として表わされるが、これはたとえば現在この瞬間までの時間的感覚を表現する時に公式的に変換されるものではない。have はあくまでも「持っている」のである。ただし、日本語の「持つ」という意味に限定されない。かなり広い範囲で「持つ」のである。We have snow in winter. や Do you have time? を思えばそのニュアンスは伝わるだろうか？過去分詞が指し示す状況を既に持っているのだから、完了の意味になるのは当然だし、結果や経験を表現するのも当たり前なのである。また状況に応じて継続を表わすことだってある。しかし、大切な点は、完了・経験・結果・継続を表わすのが現在完了形なのではなく、現在完了形によって表現される状況が結果として完了・経験・結果・継続を表わしているにすぎない。だから「これは完了だろうか？」などと考えるのではなく、have の意味をそのままに捉えることが重要なのである。では、具体的に見てみよう。I have been there. はそこに行ったことがあるという経験を表わしているのだが、この直接的な感覚は I have myself been there.（私は、そこにいたと言う状態である私自身を持っている）。となる。だから I have often been to the united states. なら「私はアメリカへ頻繁に行っていたという私自身を持っている」ので「私は何度もアメリカに行ったことがある」となるわけで、あるいは I have been to the station to see my friend off. なら「私は駅まで友人を見送りに行ったという私自身を持っている」ので、その状況から「私は友人を見送りに駅まで行ってきたところである」となるべきだろう。ちなみに、I have been to the united states.　と I have been in the united states. はどちらも同じ日本語訳になるだろうが感覚は異なる。これまでも見てきた様に、to はその方向へと言うニュアンスを持つので、アメリカに「行く」という行為を意味し、in はアメリカに（一定の期間）存在したという状況を意味する。だから、「行ったことがある」と言いたいのなら to だろうし、「いたことがある」と言いたいのなら in であろうが、「いる」ためには行かなくてはならないし、「行った」以上はそこにいるのは当然なので、もちろん、どちらの場合にも両者は等しく選択されて構わない。話し手の感覚がどう思っているかという事になる。したがって、He has gone to the united states. は He has himself gone to the united states. となり、「行ってしまった彼」を彼自身が現在持っているので「彼は既にアメリカに旅立った」となる。I have been ～は経験で、He has gone は完了であるというのではなく、使われる動詞（過去分詞）の意味やその時の状況によって完了の意味になるのか経験の意味になるのか変わるにすぎない。ちなみに、I have been in the united states. は話し手の現在の状況に応じて「アメリカにいったことがある」とも「アメリカにいままで（ずっと）いる」とも受け取れるので、once（一回だけ）や since five years ago（５年前から）などのような意味を補う文章が続く場合が多いが、なんにしても「アメリカという場所にいた私自身」を「現在の私が持っている」という感覚は共通している。さて、ここで過去分詞として用いられている単語を文法的に

注目すると自動詞であることに気付く。したがって、oneself が続くのであろう。だから Spring has come. も Spring has itself come. と考えて問題ないだろう。そして、oneself は重複的な表現（副詞的な意味）と感じられるために脱落してしまったのだろうと考えられる。

では、他動詞の場合はどうだろうか？ I have already eaten breakfast. は I have breakfast already eaten (by me). という感覚で捉えられる方がよく理解できる。私は「既に私によって食べられた朝食を持っている」ので「朝ご飯を既に食べた」となるのである。この場合の breakfast は脱落させられない。だから単純に語順が入れ替わった（倒置）と考えられる。実際に現在でも、I have my wallet stolen.（私は財布を盗まれた）という表現があるし、15 世紀以前の古い英語では I have breakfast eaten. の様に表現されていたことは事実である。こう見てみると、受動態の文型同様に完了形の場合も have+ 過去分詞ではなく、感覚的には have+ 形容詞と考える方が理に適っているのであろう。英語の場合は形容詞が名詞の後ろから係る場合など頻繁にあるのだから。

ところで私は、自動詞や他動詞と言った言葉を敢えて説明のために用いた。しかし、その単語が他動詞であるとか自動詞であるとか考えた瞬間に英語を使えない。その動詞の持つ意味と前後の文脈から普通に判断すればよいだけのことである、という説明もそもそもが本末転倒していることはご理解いただけるだろう。なぜなら「自動詞だから〜〜〜」「他動詞だから〜〜〜」なのではなく、このような使われ方をしている単語を自動詞とか他動詞とかにあとから分類したにすぎないのである。なんにしても、結果としてその時間経過を表現することになるのだが、実際には現在の有り様を表現する形が現在完了形だと考えてよいし、そう考える方がきわめて自然だと思う。また、「持つ」の have は動詞なので疑問や否定は助動詞の do や do not を用いるが、完了形の have はそもそも助動詞であるので疑問も否定もそのまま使えると考える方もいるだろう。これは文法的には正しい。しかし英国では「持つ」という意味の時でも Have you 〜？や You have not 〜 . で表現するし、米国でも「持つ」の意味で You have got 〜 . という形を用いる。言語は時間によって変化する。その過程で文法的な使われ方は大きく変わるだろうが、話している人間は文法を意識して話はしない。たとえば人形劇のサンダーバードをご存じだろうか？このかけ声ともなっているフレーズは Thunderbirds are go! である。be 動詞の後に go である。辞書で引くとこの go は形容詞であるらしい。結局、文法は既に存在する言語を説明するだけのものなのである。

さて、ここまでを理解すると次のような「応用問題」も理解できる。should（〜すべきである）を過去の意味（〜すべきであった）として用いる場合に、should have ＋ 過去分詞となる。「私はそれをすべきであったのに・・・」なら I should have done it at that moment! である。これも I should have myself done it at that moment（私は、それをした私自身を現在持っているべきだ）と考えてよい。そう考えるとこのような用法や熟語など覚えなくてもこの表現は使える。また、日本で製品を購入した場合に「当社ではこれまで製品には万全を尽くしてきました・・・」と言った文面に出会う。これをこのまま英語に直すとどうなるであろうか？直訳すれば現在完了進行形を使って We have been trying to do our best 〜 . みたいになるであろうし、この英文を日本語に訳せば「当社ではこれまで万全を尽くして・・・」となる。しかし、この日本語が意味するところと英文が意味するところはまったく異なる。日本語は、これまで万全を尽くしてきたという企業努力の姿勢を伝えているのに対して、英文では「これまでずっとトライし続けてきたのにまだ達成されていない」という意味になる。この様に、正確に英訳ができているにもかかわらず意味がまったく異なる事実は、何を意味するのかを的確に捉えることが重要であることを明確に示す。伝えたい内容を正確に表現するためには、元の日本語とはまったく異なる英語で表現せざるをえないことも頻繁にある。

助動詞の感覚

should が出てきたので助動詞のニュアンスについても少しだけ触れておいた方がよさそうだ。

たとえば、It can be true. と It may be true. あるいは It must be true. に It will be true. It would be true. It should be true. It could be true. It might be true. などのニュアンスの違いはご理解できるだろうか？これらは全て独立に覚えるものではなく、その助動詞の本質的に持つニュアンスを取り込むだけで理解できるのである。

全部を解説するのも冗長になるので、おなじみの can について考えてみよう。「～できますか？」と聞く時に Can you ～？と言うことはご存じだろう（なお「英語を話せますか？」は Do you speak English? であって Can you speak English? ではない！）。しかし、Can you ～？は「～してくれませんか」という依頼の表現に用いられることもある。元を質(ただ)せば同じ意味合いで「～できますか」の意味合いから「（私のために）～できますか」となり「～してくれますか」「～してください」となる。だからお願いする時の本来の形は Can you do it for me, please? である。では過去形にして「（昨日あなたは）～することができましたか？」はどう表現するのだろうか？ Can の過去形で could を使うのだろうか？ Could you ～？とすると「お願いですが～してくださいませんでしょうか？」という丁寧に何かを依頼する表現になり、決して「できましたか？」にはならない。英語では時制をひとつ戻すことで仮定法の意味を持つために丁寧な感覚を与えるからである。「（昨日あなたは）～することができましたか？」を英語で言うと Were you able to ～？である。ご理解いただけるだろうか？ able とは to ～を伴って「～する能力を有する」となり、それが be 動詞によって主語とイコールの関係になるから、「私（あなた）は～できる。」という明確な意味になる（able は名詞形では ability「能力」となって have を伴う）。もちろん未来形では will be を伴って、完了形では have been を伴って使うことができる。これに対して can は未来の意味も完了の意味も持てないし、前述した様に助動詞が過去形をとるとどうしても仮定の意味合いが強くなるので過去としても用いにくいのである。さて can である。いくつかの用法を見ておこう。I can swim.（可能）You can go.（命令）You cannot run.（禁止）He can be sometimes impolite.（可能性）It cannot be true.（推量）Can it be true?（疑問的な推量）・・・辞書にはまだまだ載っているがこのくらいで話を進める。どうだろうか、これらを見て can が潜在的に持つ意味を推し量れないだろうか？分類的にはこうするしかないのかもしれないが、実は同じ表現を用いることで慣用的にさまざまな感覚を表わすことは日本語にだってある。「おまえはできる！」と言ったらその額面通りの時もあるが、状況によったら命令としても立派に通じる。「おまえはここで泳ぐことはできないんだよ」は禁止の意味を十分に伝える。He can be sometimes impolite. は He is sometimes impolite. と何が違うのか考えるとわかりやすい。後者は「彼は時々無礼である」という事実を表現するだけであるが、前者は can を伴うことで、「無礼であることが時々できる」ので「時々無礼なことをすることがある」となる。ニュアンスをつかんでいただけるであろうか？これをわかったような気になっていただけたら、It cannot be true. と Can it be true? はわかるだろう。「本当であることができない」から「本当であるはずはない」だし、「本当であることができるの？」だから「本当なの？」ってことになる。どの表現も can を抜いた文章を考えてから can のニュアンスを付け足すと理解しやすい。この他にも非常に便利な表現がいくつもあるのだが、そしてその潜在的意味を捉えることで間違いなく使いこなせる様になるのだが、これ以上は割愛させていただく。

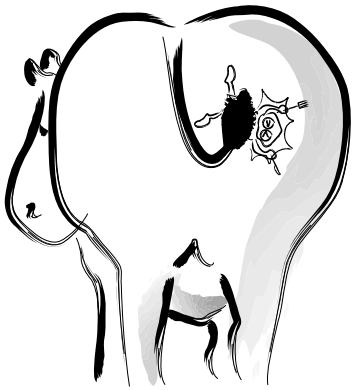
繰り返し言うが、私は何も文法の研究を否定しているのではない。英文法の研究は重要であることは否定しない。ただ、それは日本語の文法と同じ様に捉えられるべきであると主張しているにすぎない。文法というのは全て後づけの論理なのである。そもそも日本語も英語も既に存在している。その上で、その言語体系に潜む論理を文法という「かたち」で整理しているにすぎない。だから、英語を話すために文法を学ぶのは間違っていると私は言い切る。

尊敬する感覚（敬うのか評価するのか）

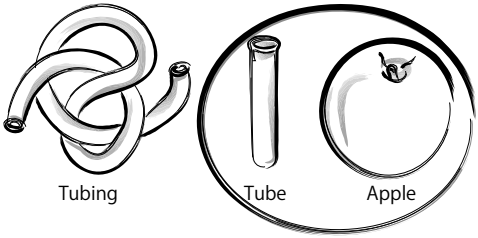
「尊敬する」を英訳する時には respect を使う。しかし、respect は、その人のある種の特性・性格・能力などの「価値」を評価して敬意を払う（認める）という意味合いを込めて「尊敬する」のである。だから、尊敬よりはむしろ尊重するという感覚の方が強い。しかし、日本人は目上の人を無条件に尊敬する文化を持つ。この感覚を英語で表現する時に「日本では早く生まれた人を respect する」というとアメリカ人は理解できないというより、明らかに混乱する。それは、日本語の「尊敬する」と英語の respect は質的に意味が異なるからである。日本語で「あいつは先に生まれてきたから、その事実を評価し、あいつの人格を全面的に認めよう」なんて言われたら意味不明だろうが、私たちはまさにこのような英語を話しているのである。英語風に言えば、「先に生まれてきた人は、誰でも私たちの祖先である。経験も豊富で生きていく上で彼らの知恵が役に立つ。また、年をとれば身体も弱るのでいたわってあげなければならない。自分たちもたどる道なので、自分たちは目上の人を敬い、目下の人からは敬われて、生活が成り立っている・・・」などとでも言うのだろうか。しかし、違う。私たちは理屈があるから敬うのではない。無条件に敬っていることを西洋的に理屈を付けようとするから無理にこの様に言うだけである。英語には「兄（姉）」「弟（妹）」という感覚は存在しない。そんなことはない！と思う方もいらっしゃるだろう。この時に「義理」の兄弟姉妹を考えればわかりやすいかもしれない。日本語の感覚では、義理でも「兄（姉）」となったら目上の人として敬う習慣がある。親でも同じ事で、義理の父母は敬うべき対象なのである。たとえ義理の兄（姉）が自分より年下であろうが、極端な場合には義理の両親が自分よりも年下の場合だってありうるわけだが、原則として尊敬すべき対象である。それに対して英語には「義理の兄」という表現は絶対に存在しえない。brother in law（法律上の兄弟、義理の兄弟）はある。しかし、この表現は書類上で使用されるものであって、普通は He is Mary's brother. の様に言うし、決して兄か弟かを意識しない。ましてや elder brother in law とはまず言わない。このようなことを言う状況などありえない。自分よりも年下なのだけど、自分の兄（姉）と結婚したから「義兄（義姉）」となった状況など表現のしようがない。My elder brother is younger than me. なんて、笑い話にもならない。「兄」「弟」の意味するものを理解してもらうには、日本文化に浸かってもらうしかないのである。

認識する感覚（数えられるか数えられないか）

「牛肉を食べた」を英語で言う時に、I ate a beef. とすると、どうなるのだろうか？この英語は成立するし、もちろん通じる。生きている肉牛にしがみついて一頭を丸ごとぺろりと平らげている状況が浮かんでくる。なぜか？ a beef としてしまったからである。この感覚も日本語にはない。日本語では「数えられる」と「数えられない」の様に説明するが、おそらくそうではない。「数えられる名詞」だから a が付くのではなく、a の後に続く名詞だから「数えられる」意味になるのであろう。食肉としての牛肉は、私たちには確かに物体として認識されるのだが、英語の論理ではものと言うよりもその状態あるいは概念としての認識に近い様に思う。「牛は１匹２匹と数えられるが、牛肉は切ったりするので数えられない」などと説明されるが、そうではなく、牛肉という「物質」ではなく食べ物という「概念」として認識されているので、それにそもそも単数も複数もありえないのだろう。英語を話す人々はこれを無意識に選択する。英語という論理体系を用いて



思考しているのだから、その英語にない感覚は理解できないのと同様に、物体として認識されれば当然数えられるし、概念を数えることはありえないと言うような雰囲気を感覚的に感じ取っているのであろう。だから、I ate a まで話した人の頭には、彼らが a で認識しているものしか存在しえない。I ate a と言えば、a lemon とか an apple とかとにかく a に規定されるものを探す。「アレ、昨日何食べたっけ？」って時も、I ate a と言いながら食べたものを思い出すが、この時に鶏肉や牛肉は絶対に頭の中にはない。すなわち、話者の意志には a といった瞬間に a の意味を持つもの以外は排除されているのである。a のあとに「物体」ではなく「概念」が続くことこそありえないのであって、数えられる名詞と数えられない名詞というカテゴリー分けはそもそもからしておかしい。だから、同じ形をしていても、a beef や a chicken と言う時と単に beef や chicken と言う時の話し手の頭の中では両者に共通性はみじんもなく、互いにまったく異なる像が結ばれているはずなのだ。



英語の論理では、まず、その物の状態が決まらなくては何も進まない。細い管を私たちはチューブと呼ぶ。理科の実験に使う試験管もチューブと呼ぶ。日本語の論理体系ではこれで構わない。両者共に実体のある物と理解しても論理が破綻しないからである。しかし英語では、試験管は一個一個数えられるという意識を無意識に持つのに対し、管は一個一個と認識されない。管は実在のものと言うよりも、中空の細長い形をした何か、あるいはそういう性質を持った「状態・概念」のような感覚なのであろう。だから管状のものを tubing と呼び tube とはまったく違った状態のものとして認識されるのである。これは、それぞれに異なる名称がついているのではなく、そもそも、それらを意識し頭に描いている像が質的に異なると言える。だから、彼らにとって tubing は数えられるものではない。というか、数えられるとか数えられないとかいう以前の段階で、本質的にまったく異なるものとして捉えられている。tube と tubing を比較すると言うこと自体がナンセンスであり理解不能なのだ。むしろ tube と apple を比較する方がよほど普通なのであろう。日本語の論理体系には決して存在しえないこの感覚を日本語でいくら説明されても理解などできるはずはない。機械だって具体的な機械を想定する時はリンゴと同じ感覚でものとして認識するから machine である。しかし、機械を概念的に考える時、たとえば機械の仕組みであるとかからくりであるとか、あるいは組織構造であるとか、そういう概念を具体的な実体としては認識できないのである。だから、からくりや仕組みのような状況・概念のようなものを頭に浮かべる時には machinery とならざるをえない。漠(ばく)とした状況のような概念的なものを思い描いている時にはそれをリンゴのような物質としては考えられない。だから当然のことながら「数えられない」。しかし、machinery が「数えられない単語」なのではなく、「数えられる」とか「数えられない」と判断されるべきカテゴリーに machinery と言う単語は入っていないのである。数えられる名詞には a がつき、数えられない名詞には a はつかないのではなく、tubing や machinery は a を想定する単語ではない。話者が a と言った時にはその後にはリンゴのような「物体」しか想定しないので、名詞に a がつくのではなく a に名詞がつくとしか言えないのである。脳の中で、状況や概念というカテゴリーに属する単語と a は共存しえないのだ。だから日本人の様に machine か machinery かと悩むことは英米人には絶対に理解できないし、数えられるか数えられないかと悩むなど想像すらできないのではないだろうか。この様に日本語で tube と tubing の違いや machine と machinery の違いを説明することはできる。しかし、その説明をたとえ完全に理解しても、日本語の論理体系の中にそのような認識を取り込んでいるにすぎない。だから、

このような説明を日本語で理解しても英語体系の中で使いこなすことは絶望的に無理なのである。

単語と文章

英単語の暗記に単語カードをよく使うが、これがなかなか覚えられない。覚えられたとしても、出てくる単語の順番を覚えているだけのことがよくある。すなわち、その単語を見ると次の単語が頭に浮かぶと言うことである。あるいは、単語帳なるもので暗記すると、そのページの穴埋めならできるが、それらの単語が単独で出てきたら思い出せないと言うことをよく経験する。試験問題を見て、「あっ、この答えは教科書のあの辺に書かれていた！」と、教科書を開いたページの右上の角のところにある光景が目に浮かぶが、その内容が出てこないこともよく経験するだろう。これは、人間の脳がその単語を覚えるための関係性（かたち）として、カードの順番だったり、ノートの中での位置だったりを利用するからである。ここまで論じてきた様に、意味はその上位の「かたち」がなければ成立できない。単語を覚えるためには意味づけする必要があるが、それは本来、英語の体系の中で意味づけされるべきであるものが、カードの順番やノートの上での他の単語との位置関係を「かたち」としてその単語に意味づけしてしまったから「その順番（位置）」という「かたち」においてその単語の意味が規定されてしまっているから当然のことなのである。この意味からも、単語カードというのは、暗記には最も不向きな方法であることがわかる。その単語の意味を正確に捉えるには、短くてもよいからその単語を含む英語の文章を覚えるのが最も手っ取り早い。なぜなら、その文章自体が英語の「かたち」を持っているからなのである。

その単語を意味づけしている唯一の「かたち」は「英語の体系」に他ならない。私が英語で論文を執筆する時には、あらゆる辞書を動員する。たとえば、まず言いたい内容に近い意味の英単語の候補を和英辞典で調べる。この時も「なんかこういう感じのニュアンスを持つ単語」という感覚で和英辞典を引くために、まずどんな日本語を調べたらよいのかに苦労する。で、ここで出てくる英単語はあくまで

も辞書で引いた日本語に近いと思われる単語であって、それが英語の文中におかれた時にどういう意味をなすのかはわからない。たとえば「それぞれ」という単語を考えると、each が出てくるだろうし、respectively も出てくるだろう。どちらも日本語に訳せば「それぞれ」となる英単語である。しかし、この二つの意味は完全に異なる。共通するところはまったく存在しない。とすれば、これらの単語がどの様に使用されているのかは英語の文章に答えを求めるしかない、というわけである。だから次に、和英辞典で調べた複数の候補を英和辞典で調べる。その際は必ず例文を比較する。この例文こそがその単語の意味を如実に示すからである。次に、候補となる単語を英英辞典で調べる。この行為は英和辞典で引くこととあまり変わらない様に思われるだろう。ランダムハウスの辞書は、もともとが英英辞典であったモノの邦訳本として英和辞典が出版されている。この両者は同じなのだろうか？これは異なると言わざるをえない。英和辞典ではその単語を日本語の体系において意味づけをなしていることである。だから、新しい単語の意味も日本語の体系の中で日本語の文脈によって説明され、それを脳の中に入れることとなる。これでは英語の体系を脳の中に作り上げることはできない。たとえ同じ内容が書かれているとしても、全ての単語を英語の文脈において英語体系の中で意味づけしたら脳の中にも英語の感覚として書き込まれるしかない。これが重要なのである。英語で意味を説明されると、その単語の持つ背景に触れることができる。説明が日本語訳になればこのニュアンスは消滅する。これが英英辞典を「読む」だけで英語力は格段に上がる理由である。

言語体系と学習

inspiration は日本語に訳しにくい。「霊感」なんてやっちゃうともう意味がわからなくなるが、これも inspire の底にある意味を理解できればわかる（わかるけれど、それを日本語では的確には説明できないのだが・・・）。私がここで何を言いたいかと言えば、辞書を引きまくる行為を繰り返すことで、日本語にしていたのでは到底理解できなかったその単語の持つ微妙な意味を理解できるのである。そうすることによって、英米人にも通じる英語の文章を書くことができると言うことである。この作業は何もむずかしくない。中学生にだってできるし、この作業の繰り返しが英語を学ぶ近道なのである。to と with の違いは、これらが含まれる文章を比べればよくわかる。しかし、それを日本語では説明できないし、説明しても明確にはならない。だから、日本語の参考書や教科書を読んでも額面上はわかったような気になるが、実はまったくわかっていない。なぜなら、日本語の「かたち」の中で to と with を意味づけしてしまったからなのである。なので、この文章をいくら読んでみてもなんの勉強にもならない。なぜならすべて日本語で説明しているのだから。とにかく、単語を単体で覚えるのを止めて頂きたい。単語の意味を英英辞典であたり、そこにわからない単語が出てくれば、さらにその単語を英英辞典で引く事を繰り返す、時には英和辞典に登場を願う必要もあるだろうが、とにかく英英辞典を読む、それだけで英語はこれまでよりも上達する。

赤ちゃんが言葉を獲得する時のことを考えてみよう。最近の研究から明らかになっていることは、まず「単語を覚え」次に「文法を覚える」のではないことである。子どもはお母さんから「トイレに行く？」と聞かれ「うん、トイレに行く」と答えるが、これはその言葉を全体として認識し、それに相当する行動と対応させているにすぎない。「トイレに行く」と「小さな部屋に行っておしっこをする」の二つが頭の中でつながった（すなわち関係性を持った）にすぎない。別の時に、「ここのトイレは綺麗よね」とか「トイレを汚したから掃除しなきゃ」とお母さんが言う。その時々で、その言葉全体と対応する行動が存在するし、その中で「トイレ」という共通の単語も出てくる。この様に、さまざまな言語の構造によって「トイレ」という単語が切り出されて子どもの脳の中で意味づけがなされる。文法においても同じことで時制などについてもたくさんの言語の構造を丸ごと受け入れていくうちに、その中から共通する構造を切り出すことによって言葉を体得するのであろう。この様に、私たちが日本語を習得する過程でも、英英辞典で英語を学ぶのと同じことをしているのである。

「私は彼女にキスをした」と「私は彼女とキスをした」の違いを説明できるであろうか？助詞の「に」と「と」の違いである。前者の場合、私が彼女に対してキスという行為を行なったことをただ示すだけなので、彼女の了解を得ていないかもしれないし、もっと言えば痴漢的な行為である可能性も含まれる。しかし、後者の表現になるとキスという行為に対して彼女も同意している様子を潜在的に示すこととなる。さて、ではこのような説明を加えたとして、しかもその説明を完全に理解したとして、外国人が「に」と「と」を使い分けられるだろうか？これは絶対に無理である。使い分けの能力を獲得するには、赤ちゃんが言語を習得する時と同様に、「彼女にキスをした」が示す具体的状況と「彼女とキスをした」が示す具体的状況を、とにかくそのまま関係づけて脳にインプットする他にない。「に」や「と」を文章から取り出して意味づけをしたとたんにゲシュタルト崩壊を引き起こすのだ。

“the” の使い方はいろいろな説明がなされる。たとえば Where is the station? と、知らない人から道端でいきなり聞かれたら答えられないそうだ。the が、聞き手も具体的に了解している「あの駅」を示しているのに、聞かれた人がその the を理解できないからしい。だからこの場合には a を使わなければならないと説明される。もちろん、その周辺に駅がひとつしかなければ the を用いて構わないようだ。また、常識的な知識に対しては the を用いても問題ないらしい。the surface of a ball（ボールの表面）という単語は、ボールには表面がひとつしかないからそれは常識でわかるはず

であるとするのである。私はこの文法的説明を、外国語を習得する上での害であると思っている。このような説明をいくら覚えても、the を使いこなせる様になんて絶対にならない。文法書を見ると、「the は国名につく」と書かれていることがある。しかしその直後に「しかし Japan などにはつかない」とも書かれている。わけがわからない。the United States of America の the は普通名詞の states についているのであって国名だからついているのではないと説明されることもある。普通名詞 states が指し示している「アメリカ合衆国」は世界にひとつしかなく、それは常識であるから the がつかなくてはならないらしい。このような覚え方をして the が使いこなせますか？逆にまったく何も書けない・話せない状況に陥るだけだろうと思う。理屈ではない。日本語にはこの the に相当する概念がまったく存在しないので私たち日本人には the を理解することなど到底不可能なのだ。英語を母国語とする人たちは、the を徹底的に意識している。彼らの論理体系が、何かを指し示す時にそれがどういう概念なのかを徹底的に識別する様にできている。日本語の助詞の場合と同じことで、「なぜ the がつくのか」など意識することはないし、意識することは実際には不可能なのである。だって、彼らは、the の論理で思考しているのだから。それを敢えて意識すると言うことは、すなわち文法を考えることに他ならない。言語は厳密な論理体系である。そこには、明確な論理が成立している。その論理は脳にインストールされ、その論理体系を用いて私たちは思考する。その論理体系を解き明かそうというのが文法である。あくまでも文法は、現実に存在する論理の後追いでしかない。だから、英語圏の人たちには日本語の名詞を使う感覚が不思議でならないはずだ。

外国語を習得することとは、認識論的な意味でまったく新しい意識世界を構築することに他ならない。私たちが決して感じなかった感性を新たに感じる様になること、そして私たちがこれまで感じ続けていた感性や価値観をひとまず否定し、その上で新しい感性や価値観を無批判に書き込んでいくことからしか外国語を操る方法はない。「てにをは」なんて日本人なら使えるだろう。しかし、これは日本語の文脈で、日本語の意識下において習得されてきたものであり、その日本語によってあらゆるものを感じ、あらゆることを思考している。日本語を話す以上、英語の現在進行形で表わされる微分的な時間感覚は感じられない。日本人が「～しているところです」という場合は、比較的長い時間を想定しているはずであり、ほんの一瞬が次々と連続している動的な時間経過を意識することはありえないだろう。

英語の学習方法

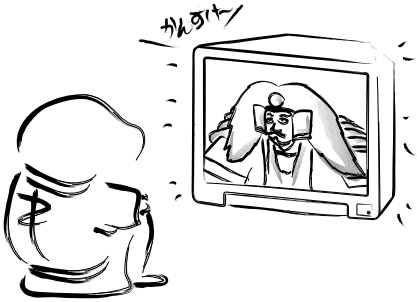
次のような経験をしたことがなかろうか？長文を読んでいるとわからない単語が山の様に出てくる。そこで「まず単語を覚えないと英語を読めない」と感じる。そして長文を読むことを止めて単語をひたすら覚え始める。しかし、全ての単語を知っているにもかかわらず、慣用句であったり特殊構文であったり、とにかく読解できない文章に出会う。その時に「単語をいくら覚えても、構文を知らないと英語を読めない」と感じる。そして単語の暗記を止めて構文をひたすら覚えようとする。しかし、またある時に英語の文章を読んでいると、全体の流れを読み取れないことに気付き、「やはり長文を読解する勉強を積まなければ」と感じ・・・・。英語を学ぶ時、このようなジレンマに陥ることは多いだろう。ではどうすればいいのか、私の答えはひとつ、長文をひたすら読むこと。そしてわからない単語は英英辞典で調べること。それだけである。その時にその英文を読むことができたらそれで目的達成で、調べた単語はすぐに忘れたって構わない。英語の中で頻出する単語は何度も出会うからその都度調べればいい。また、英語は確実な日本語訳の出ているものを読む方がいい。勝手な解釈をしてもそれが間違っていたら意味がないので、とにかく独力で読んだら、そのストーリーが正しいかどうか確認する。もし間違った解釈をしている時は、その箇所をゆっくり見直す。これを繰り返すと脳の中に英語の環境ができあがる。自分では気付かないと思うが、確実に英語を英語として理解できる。とにかく読書をするつもりで、時間があれば英文を読むことである。推理小説でも恋愛小説でも構わない。単語も構文も敢えて覚えなくてまったく問題はない。わからない単語は辞書で調べていくうちにわかる。しかも、その英語

の文章中でのニュアンスを素直に理解できるし、英英辞典での説明も英語の中でどのようなニュアンスを持つか肌で感じられる。そこに日本語が介在することはありえない。誤解のない様に一言申し添えるが、このような勉強をしている最中にも頭の中は日本語であり、日本語で考えている様に感じると思う。しかし、それを気にする必要はない。よく「英語で考える」と言うが、それは頭の中で英語を使うのではなく、自分の頭で認識できる表現はおそらく日本語なのだろうから、それを用いるのはそれでよい。実は、日本語で考えている様に思っても、英文を読み、英英辞典を調べている間は英語の論理で思考しているのだから。そのような雑念は排除して、とにかく文章を楽しめばいい。構文も同様に覚える必要はない。構文だって英語の論理体系のひとつなので、簡単に見てきた様に so ～ that ～なんて覚えなくたってそのまま意味をとることができる。また、ちょっと複雑な構文の場合には読めないこともあるだろう。しかし、それでも前後の意味から推測して無理矢理読み飛ばせばいい。そのあとで日本語訳と答え合わせをして意味がとれていないところだけじっくりと考える。その時には文法書でも構文の参考書でも分厚い辞書でも使い倒せばいい。そして、「なるほど」と理解できたらそれで十分。忘れたって構わない。あるいは、もし覚えようとするなら、その文章をもう一度最初から読み返すことだ。構文集を見るとたくさんの構文が出てくるし、それだけを取り出したら頭が混乱することもあるが、そのうちの大部分は文章の中に出てくると問題なく読み取れるはずである。また、英語の小説を問題なく読み取れる様になれば、構文など知らないうちに身に付いている。

上級編としたら、読んでいる英語の文章を丸暗記することを推奨する。日本語だって、考えて話している人はいないだろう。逆に話すことを考え出したら話せない。日常の自分を思い出して欲しい。言葉を考えながら口から発することなどありえない。ふと発する文章は、まちがいなくそれまでに何度も聞いてきたものである。それを文法や構文などを考えるまでもなく、文章として丸ごと発している。これが言語なのである。短い文章全体でひとつの意味を持つ、その文章表現とある意味が対応する、そこに単語も文法も存在はしない。文法はあくまでも後づけの論理だからである。丸暗記する文章は、できれば通俗小説よりもある程度は文学性を持ったものがいいだろう。少なくとも正確な英語が使われている、あるいは俗語やスラングが使われていないものでないと、覚えた英語が訛っている可能性があるからである。英単語は英語の中に入って初めて意味を持つ。英単語だけを覚えようとするから意味が把握できない。英語の論理体系の中で英単語を使える様になることが英語を習得する近道である。

学ぶと言うこと

いま思い出してみれば、この話の発端は理科の研究を目的として「かたち」の議論を進めることであった。議論の過程で言語に言及し、それがいつの間にやら議論が独立してしまった。そろそろこの議論は言語からも独立してきそうな勢いになっている。実は「かたち（関係性）」の議論は他の学習法にも用いることができるのである。たとえば歴史上の人物や出来事を暗記することを考えてみればいい。教科書や参考書にある文章を何度読んでも丸暗記などできない。単語カードに書くだけむなしい仕事である。でも、たとえばたまたま歴史小説を読んだりすると、その出来事や人物の関係性が脳の中にできあがる。すると、その時代の他の出来事や人物の名前も聞くだけですらすらと覚えられるのである。それは、新しい単語（要素）を受け入れる体系（かたち）ができているからにすぎない。単に丸暗記し



ただ今歴史の勉強中です

ていれば、次に聞く（学ぶ）新しい言葉もさらに丸暗記するしか方法はないが、前もってそこまでの出来事や登場人物の関係性ができあがっていれば、新しい言葉をその他も言葉との関係性で意味づけすることができる。ヒトの脳は、意味づけしなければ覚えることができないのである。だから語呂合わせなど、あらゆる意味づけの方法が受験のテクニックとして存在する。歴史の勉強に異様に強い人がいる。それは間違いなく、歴史を「かたち」として認識する才能・能力を持っている。能力ではないかもしれないが、少なくともその技術を持っているはずである。「実は数学も同様である」というと反発されるかもしれない。しかし、数学こそがきわめて純粋な論理体系なのである。数学とは公式を覚えて計算をする学問ではない。むしろ、高校で学ぶあらゆる教科の中では最も哲学に近い純粋論理体系こそが数学なのである。だから、数学を学習する方法は、その論理体系を実感することしかない。数学が得意な人は、この数学固有の「かたち」を脳の中に作り上げているのであろう。小手先のテクニックを駆使して、多くの数の練習問題をこなすよりも、この論理体系が確立してきた理由を学ぶ方が結果としては近道である。微分・積分が発見される前と発見される過程、そして発見されてからの論理体系の移り変わりを読んでみたらいい。これは決して難しいものではない。歴史小説を読む様に普通に読むことができる。こうして微分法の本質を理解して問題に当たると間違いなく「わかる！」。集合の概念も行列の概念も数学的にはきわめて重要な論理体系であり、この論理が発見されてから新しい分野が開かれているのである。新しい数学の論理体系が歴史上発見されるたびに、あたらしい哲学領域が出現する。実際に優れた哲学者の多くは優れた数学者でもあるというのは日本を除く世界では当然のことなのである。理系・文系と分け、理系のみが科学的だと誤解されているが、これは明確に間違っている。文系と理系の境界は曖昧であり、常に互いの業績は入り交じり、影響し合って進歩している。いろいろと書いたが、要するに全ての学問を学ぶには、その学問が学問として体系化されている「かたち」を頭に入れることが重要であり、最も近道であるということなのである。

したがって、たとえば勉強などにしても、ひとつのことを一年間かけて勉強するという方法論よりも、一年間の分量を２ヶ月か３ヶ月でやってしまい、それをまた繰り返して何度も勉強し直す方が間違いなく学力は伸びる。10 章からなる教科書を１ヶ月に１章ずつ勉強するよりも、２ヶ月で 10 章を読破した後に再度２ヶ月かけて 10 章をやり直すことを５回繰り返す方が身に付くということである。この方法論は、実は小学校レベルでは既に実践され大きな成果を得ている。なぜ繰り返しが有効なのだろうか？それはおそらくこうなのだろう。まず、最初に全体を鳥瞰（ちょうかん）することで脳の中にその学問の「かたち」を作ってやる。厳密には少々間違っていても構わないから、大きな枠組みを作ってやる。これがきわめて重要であると言うことなのである。第一回目の学習でもその内容を完全に理解する様に努めるべきだが、その中に誤解があってもまったく構わないし、少々わからないことがあっても何も問題ないから無視してとにかく全てをやりきることで、全体の「かたち」を脳の中に作り上げてやる。そしてそこに要素を入れ込んでやらないと、何を学んでいるのかがわからなくなる。ジグソーパズルを考えてみたらわかりやすいだろう。完成予想図を見ずにジグソーパズルを組み立てていくのはかなり大変な労力であろうことは想像に難くない。最終的にどういう「かたち」になるのかを知らぬままに要素を並べ、その結果として「かたち」が現われるというのでは、学習という意味においてはなはだ効率が悪いのである。もちろん最終的にパズルが完成すれば何も問題はないが、効率を考えると無駄な労力を使っているだろう。また、同じ学習を何度も繰り返すことは、自分の中に築いている「かたち」が正しいものかどうかを検証する作業にもなるわけで、この検証作業によって間違って作られた「かたち」（要素の関係性）は淘汰され、その状況で齟齬を生じない「かたち」として適応的に修正されていく。この過程を繰り返しながら正しい「かたち」を脳の中に形成していくことこそが技術や知識の習得になるのであるし、さらには確固たる「かたち」を脳の中に確立する最も有効な手段になるのである。

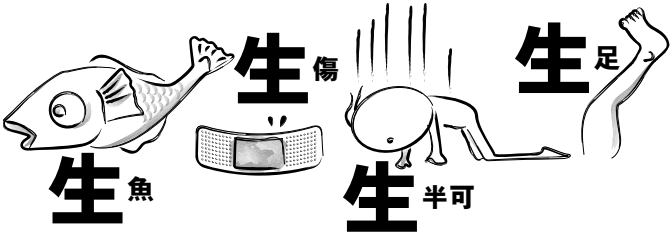
では、何度も繰り返し勉強することで十分であ

ろうか？計画的にじっくりと一回で勉強するよりも少々あらっぽくてもよいから何度も繰り返し勉強する方がよいというのは間違いなく正しい。でも、同じ内容を繰り返し勉強することは、実はそれほど効率よくもないのである。「教科書をしっかりと読めば勉強はそれで十分である」と言われる。「教科書が言わんとする内容を裏の裏まで理解すれば十分である」という意味合いなら（これだけ内容が削られてしまった教科書ではたして十分であるか？という疑問は残るものの）ある程度は納得できる。しかし、教科書だけでなく、参考書にしても同じ本を何度も勉強する時の効率は悪い。だから、できれば友達とは違う参考書を買って勉強し、一通りの勉強が済んだら友達の参考書と交換して同じところを学び直す方が能率的には数段優れている。たとえば先生に質問をする時を想像してみよう。もしも先生が授業で言ったことをそのままオウム返しに話したらやはりわからないであろうし、そんなことはしないはずである。授業中とは違った言葉で何度も説明してくれるだろうし、あなたがわからないところを見つけたらそこを重点的にあらゆる角度から異なる表現方法で説明してくれるはずである。そうすることによってあなたは理解をするのである。理解するとは、まず体系を頭に入れ、その上で各要素を意味づけするのだが、人間はしばしば間違った意味づけをする。間違っているから、その体系に入れると齟齬が生じ、結果的にわからなくなる。その時、異なる表現で説明を受けると、違った要素間の関係性として頭の中に入ってくるので、それと今まで頭の中に構築していた意味づけの間で検証することができる。そして、互いに齟齬を生じなければ、それが正解としてインプットされるし、互いに矛盾が生じるなら、それ以外の体系と比較検討し、あるいは新たに異なる表現での説明を受けることによって正しい意味づけをすることができるのである。同じ内容でも異なる日本語表現によって、その言葉の意味づけが微妙に違ってくる。それら微妙に違う複数の表現を脳にいったん取り入れて、その中から普遍的な内容と切り出すことこそが理解なのである。同じ表現しか書かれていないものを何度読んでも理解が深まることはない。

学ぶと言うことは、脳の中に新しい関係性を築き上げる行為なのである。関係性の骨組みが脳の中にできあがれば、あとは乾いた砂が水を吸う様に知識は入るが、今まで持っていなかった新しい関係性のネットワークが張り巡らされるまでは、何を覚えるにも多大な苦労を必要とするのである。だから、新しいことを学ぶには、そのことの本質的な「かたち」を脳の中にいかに早く構築できるかにかかっているのである。日本語の体系を使っている限り英語を学ぶことは困難を極めるのは当たり前なのである。そして、私たち日本人は、誰も英語の体系を脳の中には持っていない。だから、外国語を習得することは非常に難しいのである。

おわりに

あるエッセイで清水義範氏は「生（なま）」という言葉の意味を分析している。それぞれの正確な意味は「火が通っていない状態」「できたての状態」「乾いていない状態」「中途半端な状態」などだとしている。たしかに、「生魚」と「生傷」と「生半可」と「生足」の「生」の意味を言葉で定義すると共通点は見あたらないだろうし、だからこそいくつもの意味が辞書には書かれなければならない。しかし、私たちは「生」という言葉に共通する感覚を持ってこの言葉を話しているし聞いている。「生傷」の生と「生半可」の生、あるいは「生足」の生の間に言葉では表現できない共通の感覚を認識しているはずである。この事を私は助動詞 can の意味のところで書いた。日本語に直せば、あるいは文法として分解すればさまざまな分類が可能だろうが、しかし、



can を使う以上全ての場合に共通した感覚があるはずであるというのがその主張である。

日本語は非論理的であると公言する人がいる。日本語には文法はないなどと言う人がいる。日本語に英語のような文法がないという意味なら納得しよう。しかし、それは当たり前である。もし、本当に日本語に文法がないというのなら、それは日本語研究者の怠慢であろう。日本語という論理体系の根本に潜む法則を抽出できていないだけなのだから。言語は論理体系であり、その意味では数学とまったく変わるところはない。したがって、日本語が非論理的であるという議論はそもそもからして語義矛盾をはらんでいることは理解できると思う。そして、言語の理解が難しいのは、私たちが言語で思考しているのだからである。

このような感覚、言語と思考の感覚について一貫して論じてきたつもりである。「かたち論」の中で、「かたち」は要素の関係性によって成立していると書いた。それを「かたち」「要素」「関係性」「意味」「時間」などを考察しながら一般論として論じたのが「かたち論」であるが、言語と思考に関してかなり具体的に論じようと試みたのが本稿である。大半が「英語の学習法」になってしまった感はあるが、その中から言語という論理体系の概念をつかみ取っていただきたいし、脳の中に関係性を構築することが理解することであり学習することであることがわかって頂ければこれ以上の幸せはない。

2007 年 5 月 15 日発行
著　者　橋本 主税（hashimoto@brh.co.jp）
発行者　はしもちと愉快な仲間たち
図　版　阿草 耕介
公式 web サイト　はしもちの「かたち」を考える会（http://www.hashimochi.com）